

岩手県立大学

いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業

[報告書]



いわての教育及びコミュニティ形成
復興支援事業 報告書

目次

目次	1
はじめに	2
事業概要	3
事業体制、沿革	4
事業立ち上げの経緯	5
各事業報告	
① 学生ボランティアによる小中高校向け学習支援・居住支援 「学びの部屋」の5年間の取組み報告	9～18
② 学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援 いわてGINGA-NETプロジェクトをはじめとする5年間の取組み報告	19～28
③ 学生ボランティアを対象とした地域コミュニティ支援力養成 コミュニティ支援力養成研修会の開催報告	29～38
シンポジウム報告	39～49
おわりに	50

はじめに

本学では、東日本大震災の復興に向けた支援事業と復興の中核的役割を担う人材育成を推進するため、平成23年から文部科学省の補助事業「大学等における地域振興のためのセンター的機能整備事業」を活用し、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」に取り組んでまいりました。

この事業は、本学の「学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業」と県内の高等教育機関が連携して取り組んだ「いわて高等教育コンソーシアム」の「地域を担う中核的人材育成事業」の2つの事業からなり、「復興の主体」として岩手県の要望に応え、震災復興に寄与することを目的に取り組んだものです。

震災直後、県内では若いボランティアが不足。一方、学生たちは、移動手段や宿泊場所・食事の確保の難しさから活動に参加できずにいました。こうした中、本学の学生ボランティアセンターが中心となり「いわてGINGA-NETプロジェクト」を結成。これまでにない規模で、全国の学生ボランティアによる被災地支援活動が展開され、新たな被災地復興支援モデルとして大きな注目を集めました。

このプロジェクトを発展継続したのが本学の「学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業」であり、沿岸地域でのボランティア合宿を継続したほか、子どもたちへの学習支援活動や日本各地で実施した学生を対象とした地域支援に関する研修合宿を開催するなど、各種プログラムを実施してきました。

この報告書は、これら事業の平成23年からの5年間の本学の取組状況について取りまとめ、学内外に報告するものです。

本学の取組が、今後の復興支援と各地で起こりうる災害への支援の一助となることを期待しています。



岩手県立大学学長 鈴木 厚人

事業概要

いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業 【学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業】

現地のニーズを丁寧に把握しながら、応急仮設住宅における新たなコミュニティの関係構築と子どもを支援（学習支援や居場所支援）するとともに、そこに関わる次世代支援者を養成することを目的に、以下の3つの事業を実施。

①学生ボランティアによる小中高校向け学習支援・居住支援

「一般社団法人子どものエンパワメントいわて」による、心のケアと同時に進学への意欲や進路決定、夢の実現へ向かうことを目的とした、被災地の子どもたちの居場所づくり、大学生による傾聴が可能な自学自習方式の学習支援等の活動支援。



②学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援

- 全国の学生ボランティアによる被災地支援活動を展開した「いわてGINGA-NETプロジェクト」の成果を引き継ぎ、平成24年2月に本学の学生有志を中心に「特定非営利活動法人いわてGINGA-NET」が発足、被災地のコミュニティ支援活動に主体的に取り組んでいる。
- 同法人による学生の夏季休業期間や週末を活用した応急仮設住宅でのサロン活動、学校・公民館での子どもの学習支援、漁業支援、地域イベント支援等、被災地の多様化したニーズに対応した活動を実施。

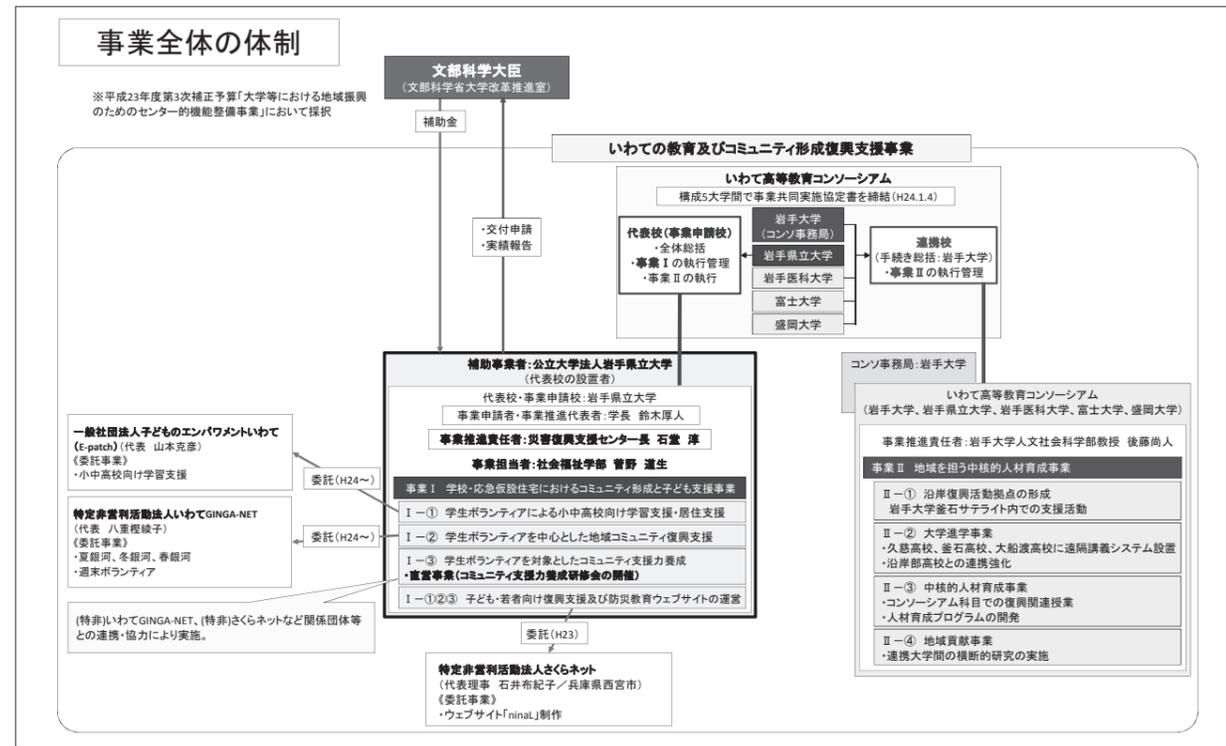


③学生ボランティアを対象とした地域コミュニティ支援力養成

災害復興支援をテーマとし、被災地域の支援だけでなく、それぞれの地元地域の防災、減災への意識を高め、将来起きうる大規模災害のプロフェッショナルの養成を目的に学生を対象とした「コミュニティ支援力養成研修会」を開催。



事業体制・沿革



「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」の歩み (岩手県立大学実施分)

- | | | |
|-------------|-----|---|
| 2011年 (H23) | 3月 | 東日本大震災発災 |
| | 7月 | いわてGINGA-NETプロジェクト開始 |
| | 11月 | 「学びの部屋」「英語の部屋」開始 |
| | 12月 | 国の三次補正予算「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」交付決定 |
| | 12月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「冬銀河」開催
きずなプロジェクト「ボランティア事前講習会」開催 |
| 2012年 (H24) | 2月 | エンパワメント・アプローチ研修会 (陸前高田市立米崎小学校) |
| | 3月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「春銀河」開催
第1回コミュニティ支援力養成研修会開催 (国立岩手山青少年の家) |
| | 6月 | 子ども・若者向け復興支援及び防災教育ウェブサイト「Ninal (ニナル)」を制作公開 |
| | 8月 | 第2回コミュニティ支援力養成研修会開催 (岩手県住田町) |
| 2013年 (H25) | 3月 | 第3回コミュニティ支援力養成研修会開催 (愛知県美浜町) |
| | 7月 | 第4回コミュニティ支援力養成研修会開催 (兵庫県神戸市) |
| | 8月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「夏銀河」開催 |
| 2014年 (H26) | 1月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「冬銀河」開催 |
| | 3月 | 第5回コミュニティ支援力養成研修会開催 (高知県高知市)
いわてGINGA-NETプロジェクト「春銀河」開催 |
| | 8月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「夏銀河」開催 |
| | 10月 | 第6回コミュニティ支援力養成研修会開催 (栃木県宇都宮市) |
| | 12月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「冬銀河」開催 |
| 2015年 (H27) | 2月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「春銀河」開催 |
| | 3月 | 第7回コミュニティ支援力養成研修会開催 (広島県広島市) |
| | 8月 | 第8回コミュニティ支援力養成研修会開催 (岩手県住田町)
いわてGINGA-NETプロジェクト「夏銀河」開催 |
| 2016年 (H28) | 2月 | いわての教育及びコミュニティ形成復興支援シンポジウム開催 (岩手県盛岡市) |
| | 3月 | いわてGINGA-NETプロジェクト「春銀河」開催 |

事業立ち上げの経緯

～平常時と災害時をつないだ学生ボランティア～

1. はじめに

2011年3月11日…あの日、あの瞬間から、これまではあたりまえだった毎日が大きく変わってしまった。それは被災した地域とそこに生きる人たちすべてに言えることであり、災害というものに対して、日本が、世界が、そのおそろしさや、人間としての無力さを痛感した出来事であったように思える。

それでも“ひと”は力を合わせ、勇気をふりしぼり、知恵をはたかせながら協力して、その危機に立ち向かわねばならなかった。岩手県立大学もまた、大きな被害を受けた被災地にある大学として、また地域に根ざした実学・実践の教育研究活動を推進してきた地元大学として、立ちあがらねばならなかったといえる。これは建学の理念にもある「地域社会に貢献する大学」が、前代未聞の危機を迎えた地域に対し、その存在意義を試されている重大な局面であったのではないだろうか。

ここでは、岩手県立大学が震災後、なぜ「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」(当時、大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業)のいくつかの重点的な事業を立ちあげることになったのかについて述べる。本事業実施には、東日本大震災発災以降、学生ボランティアによる災害支援の詳細と、災害以前の活動が大きく関わっている。そのため、少し紙幅を割くが次の項以降で述べてみたい。

2. 地震発生時およびその後の状況

3月11日(金)14時46分、岩手県立大学の所在地である滝沢村(現在の滝沢市)で、震度6弱、短期大学がある宮古市で震度5強が観測された。直後に学内にいた学生等の被害の有無を確認し、夕方17時には全学生宛に「被災した場合など大学に連絡せよ」と緊急連絡メールを一斉送信している(当時の学生支援室の記録より)。その後の数日間、大学構内各所は帰宅困難学生および近隣住民の緊急避難場所として機能し、参集可能な教職員はその運営にあっている。3月22日(火)、学内地震対策本部会議にて安否確認状況を報告しているが、災害発生から10日以上が経ったこの時点でも、在籍学生数2,527人中、23人(0.9%)が未確認であった。

地震当日は、停電等、ライフラインに被害が大きく、夕刻には大学近辺も灯りが無いために闇の中であった。緊急時の自家発電が可能であった大学が唯一、目印となったという話もあり、災害のような非常時に大学が果たす役割の1つとして、一時的な避難場所となることを想定する必要がある。被害が大きかった沿岸部では小中高校や福祉施設などが避難所となったわけであり、この経験をきっかけに大学内の備蓄品も含め、災害を想定したさまざまな整備が進んだ。また、近隣住民にとって、大学施設そのものが、ふだんから地域に開放されていることや、学生と地域住民の関係構築が図られていることも大切な要素であることが再認識された。このことについては後述する。

3. 学生ボランティアセンターによる平常時の活動と災害時の初動

岩手県立大学では、新潟県における中越地震(2004)、中越沖地震(2007)における災害支援活動の実績があり、そのことが大学開学10周年の2008年4月、学生ボランティアセンター(以下、学生VC)の開設へと結びついた。特に2007年の中越沖地震では被災地の災害ボランティアセンターの運営支援を約2ヶ月間行っている。この時、災害支援チームに参画した学生らが、あらたに開設した学生VCの準備にあたることとなった。岩手県立大学学生VCは当時全国に約100箇所あった大学内ボランティアセンターとしては唯一、“大学設立学生運営”の形態をとった。教職員は配置せず、学生による自主運営とし、アドバイザーという役割で筆者を含む2名の教員が活動をサポートしていた。大学の教職員をセンター長とする形態が多い中、あえて学生を組織の代表とし、運営委員会のようなしくみをつくらなかったことには意図があった。それは災害支援の初動時に効率的に対応することができるようにというものであった。

学生VCの平常時の活動の柱は大きく2つとした。1つは、地域からのボランティアニーズとボランティアを希望する学生を調整することであり、もう1つは地域へのアウトリーチとして、平常時から地域住民と顔の見える関係を築き、災害時に備えるという防災・減災活動であった。他大学との大きな違いは、こうしたプロジェクト型組織を学生VC内に複数つくったことであり、そこに企画、運営や資金調達等を学ぶ機会を持っていたことである。主なプロジェクトとしては、DoNabenet（ドナベネット：地域でお鍋を囲んで語り合うサロン活動）、いわてチャリパト隊（自転車による近隣パトロール）、他にも冬季の雪かき（スノーバスターズ）や小学校の登下校支援（スクールガード）等を実施している。

このような平常時の活動から、東日本大震災発生当日には学生VCにて、学生によるミーティングが実施され、即座に近隣の安否確認を実施している。また3月14日（月）には、平常時の学生VCを「学生災害ボランティアセンター」として、SNS等により、情報発信を行った。実はこの時、当時の学生VCを運営する中心的メンバーを含む学生9名と筆者は、「IDOプロジェクト」（フィリピンで井戸を掘るというボランティアワークキャンプ）に参加（3/8～3/17）しており、SNS等による情報共有や活動に対する助言を遠隔地から行うことが限界であった。

4. 現地災害ボランティアセンター運営支援期間

3月17日（木）、フィリピンから東京へ帰国した学生らは、岩手県までの帰路を秋田県経由とせざるをえなかった。筆者は全国社会福祉協議会に立ち寄り、支援P（災害ボランティア活動プロジェクト会議）で打ち合わせを行い、岩手県の災害ボランティアセンター立ち上げと運営支援の担当として、19日に車で現地（陸前高田市など）入りしている。その後、連日、岩手県沿岸部の被災地域を巡回し、各地の被害状況の確認と災害ボランティアセンター開設、運営支援の体制づくりを行った。この時、同行していたのが「岩手県担当（支援P）」のもう1名である石井布紀子氏（本事業を協働する特定非営利活動法人さくらネット代表理事）であった。

支援P（詳細は割愛する）は、これまでから災害時に備え、全国社会福祉協議会とともに各自治体の社会福祉協議会職員や地域の災害系NPOに対し、研修等を実施している。また現地の被害状況を把握した上で、外部からの支援体制を調整する役割を担う。特に今回の災害では、本来現地にて災害ボランティアセンターを開設し運営する社会福祉協議会等が大きな被害を受けていた（建物の全半壊や、職員の死亡、行方不明など）ことが外部からの支援受け入れを困難なものとしていた。そこで、現地社会福祉協議会や支援Pとも相談し、釜石市および陸前高田市の2箇所にて岩手県立大学学生VCの「災害支援経験者」を派遣することとした。

こうした動きは中村慶久学長（当時）や佐々木民夫副学長（当時）のサポートもあり、新学期開始の前日（4月17日）までに、のべ252名の学生が現地災害ボランティアセンターの立ち上げから運営支援に参画することにつながっている。

5. 過去の災害支援体験を被災地に活かす（いわてGINGA-NETプロジェクト試行）

1ヶ月以上遅れながらも大学は通常の授業期間を迎えた。しかしながら被災地の復旧には多くのボランティアの協力と時間が必要であることは明らかであった。中越沖地震（2007）での現地支援経験がある学生および、その2年後（2009）の「仮設住宅から復興住宅への移行期ボランティア」（現地に20日間滞在し約60件の引越作業）の経験がある学生たちは、次のまとまった活動期間として、夏休みを視野に入れていた。2007年、2009年といずれも外部支援者として現地入りした学生たちが苦労したのは、①被災地までの移動手段、②活動期間の滞在拠点、③滞在期間における現地での移動手段、④これらに必要な資金、以上の4点であった。被災した沿岸地域は、滞在する場所どころか町ごと消滅したといわれているところもある。また大学所在地の内陸部から沿岸部へは片道100～150km、順調に車で移動しても3時間前後であり、日帰り往復しながらの活動は困難とされていた。

そこでまず、沿岸に最も近い市や町に問い合わせ、滞在拠点として可能な場所探しにとりかかった。

幸い、気仙郡住田町に廃校となった体育館と校舎跡地に完成した公民館があると聞き、教育委員会に問い合わせたところ、被災地支援の拠点という目的や、地元大学が管理し、全国からの学生ボランティアを受け入れるということで借用在が認められた。そこで学生たちは早速、夏休みに向け、試験的にこの拠点活用の準備にとりかかった。ちょうど時期的にゴールデンウィークを迎えたため、その期間を活用し、可能な限り他大学に声をかけたところ、全国の13大学からのべ512名がボランティアとして活動することができた。夏休みに向けた「しくみ」ができるのではないかと確信を得た。

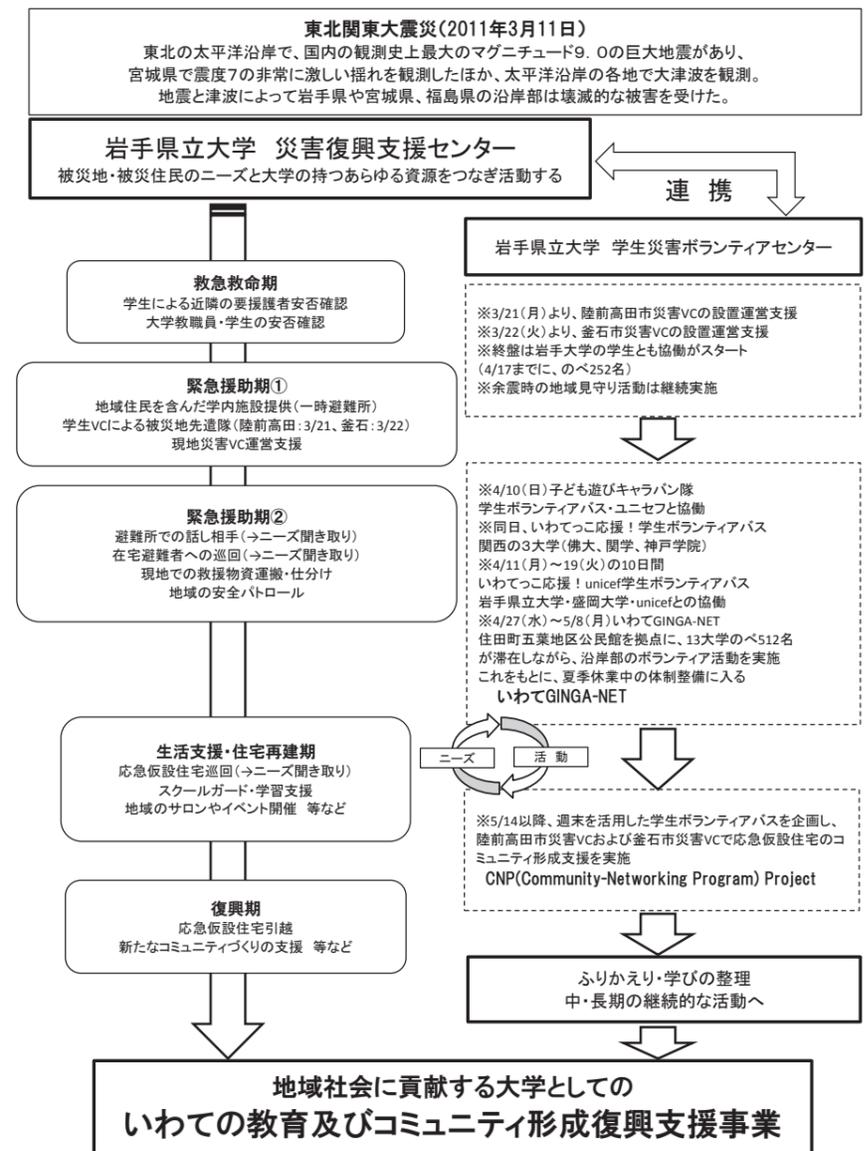
6. いわてGINGA-NETプロジェクト実施へ

ゴールデンウィークを終えてすぐに、夏休みの2ヶ月間を活用したしくみづくりに奔走することとなった。夏に向けた準備には、災害支援や学生ボランティアセンターに詳しい団体（特定非営利活動法人ユースビジョン、以下ユースビジョン）の協力を得ることが出来た。

まず、全国の大学への呼びかけを大学内のボランティアセンター宛のDMで行い、ユースビジョンによる調整のおかげで、6月からは全国6箇所（大阪・東京・愛知・静岡・岡山・兵庫、以上実施順）での説明会を手分けして実施した。また特定非営利活動法人さくらネット（以下、さくらネット）や岩手県社会福祉協議会の協力により、

拠点の環境整備や資金調達を進めた。特に本学の学生災害VCが、社会福祉協議会が運営する災害ボランティアセンターに準じるものとして、赤い羽根共同募金から活動資金助成を受けることができた。社会福祉協議会以外の団体が助成対象となることは極めて稀であり、その後のいわてGINGA-NETプロジェクトの運営に大きく影響することとなった。こうして「①被災地までの移動手段、②活動期間の滞在拠点、③滞在期間における現地での移動手段、④これらに必要な資金」が整うとともに、拠点運営の学生スタッフ体制等も準備を進めた。

詳細は後の報告で述べられているが、最終的に2ヶ月間（一般参加学生は1週間ごとの7週間）で、全国各地の大学（高等教育機関）146校から、実数で1,086名の学生ボランティアが岩手県住田町に集まり、仮設住



宅の集会所でのサロン活動、子どもたちの学習・遊び支援を行い、地域コミュニティ支援に取り組んだ。
(ここまでの流れは前ページの図を参照)

7. 文部科学省との直接的出会い

岩手県立大学内の災害復興支援センターと学生災害VCの連携により、本格的な災害支援体制が整う中、筆者は支援Pとしての役割もあり、岩手県災害ボランティアセンター本部（岩手県社会福祉協議会内）を拠点に、主に岩手県沿岸南部6市町を巡回していた。前述のいわてGINGA-NETプロジェクトの準備が整いはじめたころ、文部科学省から“岩手県支援のキーパーソン”として、連絡をいただく機会があった。当時は全国から被災地に対し、さまざまな支援の申し出もあり、文部科学省では教育・スポーツ・文化に関わる団体や専門家による支援先の情報を必要としているとのこと。岩手県全域の被災地情報を持ち、学生ボランティアの体制を整備しているようすを知った方からの連絡であった。それ以降、文部科学省副大臣（当時、鈴木寛氏）の現地視察を何度かお引き受けし、同行されていた南郷市兵氏（現、福島県立ふたば未来学園高校副校長）からも多くの助言をいただきながら、この事態での岩手県立大学の役割が明確となっていった。このお二人をはじめ、当時は多くの文部科学省のみなさんのご協力をいただき、本事業を展開することとなった。また、事業内容がより具体化するにあたっては、被災した各市町や県の教育委員会、社会福祉協議会、NPO団体や、仮設住宅にお住まいの自治会長さん等、多くの方々との出会い、対話が大きな力となっている。

8. それぞれの事業への思い

当初より、本事業担当であった筆者は、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」をより具体化し、発災当初からの学生の力を活かし、下記の1つのテーマについて、3事業を柱として実施した。
テーマ：学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業

- ①学生ボランティアにおける小中高校向け学習支援・居住支援
- ②学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援
- ③学生ボランティアを対象としたコミュニティ支援力養成

また、それぞれの事業推進に関する主な連携組織として、以下を位置づけた。

- ①岩手県立大学（災害復興支援センター、学生ボランティアセンター等）
- ②NPO法人いわてGINGA-NET
- ③一般社団法人 子どものエンパワメントいわて

※②、③は本学卒業生らの組織であり、大学と社会を行き来し学びあう場、リカレント教育の場にもなっている。

この5年間の本事業は、大学が中心となって地域を復興する、つまり地域の変化を促すことだけでなく、もう1つの重要な役割を果たしている。それは、この事業に関わった大学や学生たちの変化である。特にいわてGINGA-NETプロジェクトに関わった全国の学生は、ボランティアを通して、多くを学んでいる。その学びは被災地のことを風化させないという意味だけではなく、災害による地域のダメージやそれに対する支援のあり方、あるいは未然にそのことを防ぐ防災や、被害を出来る限り小さくするための減災という“ふだん”のあり方を考える機会となっている。いわてGINGA-NETプロジェクトから誕生した各地の大学の団体やプロジェクトは多く存在する。5年が経った今も、あの時、高校生、中学生だった若者が、いわてGINGA-NETプロジェクトに参加してくれる。さらに、大学を卒業した仲間が真剣に次の災害に備え、“今”の地域を「災害にも強いまち」にしよう動きはじめている。そのことを大切にしながら、大学として在學生はもちろんのこと、若者の育ちを支え続けることが重要な役割である。復興の道はまだ続いてはいるが、文部科学省によるこれまでのご支援に感謝し、災害時に果たせた大学の役割を平常時につなぎ、さらなる地域社会への貢献、次世代の育ちを推進していきたい。

(日本福祉大学 准教授 山本 克彦)

① 学生ボランティアによる小中高校向け学習支援・居住支援 「学びの部屋」の5年間の取組み報告

1. 事業概要

- ・学習支援事業 「学びの部屋」
小・中・高校生を対象とした居場所・学習場所の設置
宮古・釜石・大船渡・陸前高田・住田の5市町15か所で開催
- ※一般社団法人 子どものエンパワメントいわてへ業務委託し実施

法 人 名	一般社団法人 子どものエンパワメントいわて
設立年月日	2011年10月17日
所 在 地	〒020-0044 岩手県盛岡市城西町13-63
設 立 趣 旨	東日本大震災の被災地である岩手県内において、被災地の児童のエンパワメントを促進する機会を若者たちの参画により創出し、被災地の児童が自分らしい生き方を実現して、主体的に復興のまちづくりに関わっていくことを目的として設立。
代 表 理 事	山本 克彦
理 事	石井 布紀子
事 業 内 容	東日本大震災の被災地児童へのエンパワメントを中心とする復興支援プロジェクト。およびエンパワメントに参加する支援者の養成。生活困窮家庭を対象にした学習支援の取り組み。

2. 「学びの部屋」の沿革

2011年10月17日	法人設立
2011年11月	陸前高田市立高田第一中学校・横田中学校・米崎小学校で「学びの部屋」を開始
2012年2月	釜石市小佐野地区公民館・甲子地区生活応援センターで期間限定で開催
2012年2月	宮古市崎山自治会館で開始
2012年6月	宮古市佐原地区センターで開始
2012年9月	大船渡市杉下仮設住宅・甫嶺仮設住宅・仲崎浜仮設住宅で開始
2012年10月	宮古市楯ヶ崎仮設団地ODENSE 2号・佐原地区センターで開始
2012年11月	陸前高田市立広田小学校で開始
2013年1月	釜石市立唐丹中学校で開始
2013年6月	グリーンピア三陸みやこ仮設住宅で開始
2013年7月	大船渡市大立仮設住宅・大田仮設住宅で開始
2013年7月	釜石市立東中学校で開始
2013年7月	住田町立世田米中学校で開始
2014年3月	宮古市楯ヶ崎仮設団地ODENSE 2号閉鎖
2015年4月	大船渡市大立仮設住宅を閉鎖
2015年4月	大船渡市赤崎地区公民館で開始
2015年3月	宮古市グリーンピア三陸みやこ仮設閉鎖
2015年3月	宮古市佐原地区センター閉鎖
2015年7月	宮古市崎山自治会館閉鎖
2015年7月・8月	宮古市立崎山中学校で期間限定で開催
2015年11月	宮古市立崎山中学校で開始
2015年9月	宮古市第二中学校グラウンド仮設住宅で開始
2015年10月	陸前高田市立横田中学校閉鎖
2015年11月	大船渡市甫嶺仮設休止

3. 「学びの部屋」の概要

震災の後、学び場所を失った子どもたちによりそうことを目的とし、「学びの部屋」の開催にむけ取り組みました。

「学びの部屋」は、学習する機会を失った子どもたちによりそう機会と場を提供します。陸前高田市から始まった「学びの部屋は」現在、陸前高田市、大船渡市、宮古市、釜石市、住田町にて合計15ヶ所（2016年2月末現在）となっています。学校や仮設住宅の集会室、公民館などをお借りしています。

「学びの部屋」の参加者は、中学生が主であり、高校生や小学生が参加している会場、不登校や発達障害の子どもが参加している会場もあります。地元の教員OBや塾講師などの支援員、週末や長期休暇には、学生ボランティアが支援に入ります。学生ボランティアは、ロールモデルとなり、親しみやすい相談相手として、活動を支えています。

「学びの部屋」とは
 子どもたちが安心して過ごせる三間（サンマ）を提供する場所です。

- ◆空 間... 「学びの場」として安全・安心な学習部屋があります。
- ◆時 間... 平日は夕方～夜の時間、日曜日は日中の間、学習支援相談員との学習時間を確保します。
- ◆仲 間... 一緒に学ぶ仲間だけでなく、学習を見守ってくれる学習支援員、若さと元気いっぱい的大学生...心強い仲間がいます。

4つめの間もあります。それは...

- ◆すき間... 勉強の合間の休憩時間や、ちょっと教室を出てポ～っとする空間など、実施場所にもよりますが、仲間と話をするような“ちょっとした時間や空間”もあります。

こうした場所で過ごすことで、自分自身の夢を描いたり、進路を考えたり、そのために必要な勉強をしたり。自学自習を基本として、サポートするおとなに見守られながら、広い意味での学習を進めることができるのが「学びの部屋」の特徴です。岩手県内では、宮古市、釜石市、大船渡市、陸前高田市、住田町で実施されています。

学力向上や進学のための入試対策... そうしたことへの「ヤル気」は、自分自身の夢や将来の姿を描くことからはじまると「学びの部屋」では考えています。夢を描くことができると、元気になれる、ヤル気も出てくる... そのことからスタートしてみましょう。

～参加者向け案内より～

(1) 各年度別実施状況

年 度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
期 間	2011年11月～ 2012年3月	2012年4月～ 2013年3月	2013年4月～ 2014年3月	2014年4月～ 2015年3月	2015年4月～ 2016年1月
実施日数累計	59	380	1,865	1,835	1,406
参加者累計	527	2,623	12,223	9,502	6,300
支援員累計	25	461	3,589	3,213	2,147
ボランティア累計	110	295	886	453	220

【平成23年度】

陸前高田市において、毎週日曜日に3会場（陸前高田市立横田中学校、陸前高田市立米崎小学校、陸前高田市立第一中学校）で中高校生への学習支援を実施した。延べ59回、110名の学生ボランティアを派遣した。

【平成24年度】

■陸前高田市の学習支援の継続、宮古市の学習支援の通年での実施・大船渡市での実施検討

	実施状況	実績
陸前高田市	毎週日曜日に3会場（陸前高田市立横田中学校、陸前高田市立米崎小学校、陸前高田市立第一中学校）で中高校生への学習支援を実施した。延べ59回、110名の学生ボランティアを派遣した。	10校から延べ1,148名の生徒が参加した。登録生徒数は214名にのぼった。
宮古市	毎週火曜日、土曜日に4会場（崎山自治会館、駒形通公民館（平成24年12月～）、佐原地区センター（平成24年6月～）、鉾ヶ崎ODENSE2（平成24年10月～））で中学生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ55回、100名のボランティアを派遣した。	3校から延べ188名の生徒が参加した。登録生徒は39名にのぼった。
大船渡市	新たに、毎週日曜日に2会場（大立仮設住宅（平成24年7月～）、越喜来地区仮設住宅3箇所（平成24年9月～））で小中高校生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ29回、48名のボランティアを派遣した。	7校から延べ64名の生徒が参加した。登録生徒は58名にのぼった。
ま と め	3市を合わせ、17校（各会場の重複を除く）から1,400名の生徒が参加し、登録生徒は311名にのぼった。	

■学生の長期休業期間を活用した学習支援（集中型）の実施

	実施状況	実績
夏期休業期間	平成24年8月9日～9月25日の学生の夏期休業期間中、3市6箇所で開催回数延べ64回、156名のボランティアを派遣した。	678名の生徒が参加
冬期休業期間	平成24年12月25日～平成25年1月6日の学生の冬期休業期間中、3市7箇所で開催回数延べ13回、36名のボランティアを派遣した。	122名の生徒が参加
春期休業期間中	平成25年2月7日～3月31日の学生の春期休業期間中、3市10箇所で開催回数延べ77回、256名のボランティアを派遣した。	629名の生徒が参加

【平成25年度】

■陸前高田市・宮古市・大船渡市での学習支援の継続、釜石市の学習支援の通年での実施

	実施状況	実績
陸前高田市	毎週2～6回、4会場（陸前高田市立第一中学校、陸前高田市立横田中学校、陸前高田市立米崎小学校、陸前高田市立広田小学校）で中高校生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ119回、266名のボランティアを派遣した。	8校から延べ710名の生徒が参加した。登録生徒数は154名にのぼった。
宮古市	毎週2～3回、5会場（鉾ヶ崎地区仮設集会所ODENSE2、佐原地区センター、崎山自治会館、津軽石地区駒形通公民館、グリーンピア三陸みやこ仮設住宅）で小中学生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ35回、79名のボランティアを派遣した。	5校から延べ174名の生徒が参加した。登録生徒数は66名にのぼった。
大船渡市	毎週1～5回、5会場（大立仮設住宅、越喜来地区仮設住宅（杉下、甫嶺、仲崎浜）、大田仮設住宅）で小中高校生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ89回、159名のボランティアを派遣した。	5校から延べ396名の生徒が参加した。登録生徒数は56名にのぼった。
釜石市	新たに1会場（釜石市立釜石東中学校）で中学生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ4回、5名のボランティアを派遣した。	1校から延べ64名の生徒が参加した。登録生徒数は53名にのぼった。
住田町	新たに、1会場（住田町立世田米中学校）で中学生への学習支援を実施した。学生の長期休業期間を除いた開催回数は延べ7回、12名のボランティアを派遣した。	1校から延べ8名の生徒が参加した。登録生徒数は27名にのぼった。
まとめ	5市町を合わせ、20校（各会場の重複を除く）から1,352名の生徒が参加し、登録生徒は356名にのぼった。	

■学生の長期休業期間を活用した学習支援（集中型）の実施

	実施状況	実績
夏期休業期間	平成25年7月31日～9月26日の期間中、4市1町13箇所で行った学習支援を実施した。開催回数は延べ86回、309名のボランティアを派遣した。	755名の生徒が参加
冬期休業期間	平成25年12月25日～平成26年1月10日の期間中、2市4箇所で行った学習支援を実施した。開催回数は延べ11回、37名のボランティアを派遣した。	127名の生徒が参加
春期休業期間中	平成26年2月18日～27日の期間中、1市4箇所で行った学習支援を実施した。開催回数は延べ24回、81名のボランティアを派遣した。	280名の生徒が参加

【平成26年度】

■陸前高田市・宮古市・大船渡市・釜石市・住田町での学習支援の継続

	実施状況	実績
陸前高田市	毎週2～6回、4会場（陸前高田市立第一中学校、陸前高田市立横田中学校、陸前高田市立米崎小学校、陸前高田市立広田小学校）で中高校生への学習支援を実施した。延べ689回開催、261名のボランティアを派遣した。	延べ3,974名の生徒が参加した。登録生徒数は254名にのぼった。
宮古市	毎週2～3回、5会場（鉾ヶ崎地区仮設集会所ODENSE2、佐原地区センター、崎山自治会館、津軽石地区駒形通公民館、グリーンピア三陸みやこ仮設住宅）で小中学生への学習支援を実施した。延べ410回開催、44名のボランティアを派遣した。	延べ1,705名の生徒が参加した。登録生徒数は164名にのぼった。
大船渡市	毎週1～5回、5会場（大立仮設住宅、越喜来地区仮設住宅（杉下、甫嶺、仲崎浜）、大田仮設住宅）で小中高校生への学習支援を実施した。延べ474回開催、87名のボランティアを派遣した。	延べ1,381名の生徒が参加した。登録生徒数は72名にのぼった。
釜石市	毎週3回、2会場（釜石市立唐丹中学校、釜石東中学校）で中学生への学習支援を実施した。延べ133回開催、43名のボランティアを派遣した。	延べ1,734名の生徒が参加した。登録生徒数は87名にのぼった。
住田町	毎週2回、1会場（住田町立世田米中学校）で中学生への学習支援を実施した。延べ129回開催、18名のボランティアを派遣した。	延べ708名の生徒が参加した。登録生徒数は19名にのぼった。
まとめ	5市町を合わせ、延べ9,475名の生徒が参加し、登録生徒は596名にのぼった。	

【平成27年度】

■陸前高田市・宮古市・大船渡市・釜石市・住田町での学習支援の継続 [2月29日現在]

	実施状況	実績
陸前高田市	毎週2～6回、4会場（陸前高田市立第一中学校、陸前高田市立横田中学校、陸前高田市立米崎小学校、陸前高田市立広田小学校）で小中高校生への学習支援を実施した。延べ536回開催、187名のボランティアを派遣した。	延べ2,449名の生徒が参加した。登録生徒数は145名にのぼった。
宮古市	毎週2～3回、3会場（崎山自治会館、宮古市立崎山中学校、津軽石地区駒形通公民館、第二中学校グラウンド仮設住宅）延べ198回開催、0名のボランティアを派遣した。	延べ1,504名の生徒が参加した。登録生徒数は83名にのぼった。
大船渡市	毎週1～3回、5会場（赤崎地区公民館、越喜来地区仮設住宅（杉下、甫嶺、仲崎浜）、大田仮設住宅）で小中高校生への学習支援を実施した。延べ424回開催、21名のボランティアを派遣した。	延べ891名の生徒が参加した。登録生徒数は54名にのぼった。
釜石市	毎週2回～6回、2会場（釜石市立唐丹中学校、釜石東中学校）で中学生への学習支援を実施した。延べ157回開催、12名のボランティアを派遣した。	延べ1,255名の生徒が参加した。登録生徒数は37名にのぼった。
住田町	毎週2回、1会場（住田町立世田米中学校）で中学生への学習支援を実施した。延べ91回開催、0名のボランティアを派遣した。	延べ201名の生徒が参加した。登録生徒数は10名にのぼった。
ま と め	5市町を合わせ、延べ6,300名の生徒が参加し、登録生徒は329名にのぼった。	

(2) 実施成果

- 被災生徒が安心して過ごせる居場所・学習場所を継続的に提供することで、子どもたちの心のケアや、学生ボランティアとの対話によるキャリア教育が図られた。
- 学生ボランティアとの関わりを通す中で、生徒たちは将来への希望が生まれたり、目標に向かって学習に取り組む変化、生活態度や習慣の向上といった変化が生じた。
- 福祉や教育の仕事に就きたい学生ボランティアが、継続的に子どもたちや関わり支援員等と交流を通す中で、支援に関して知識や経験を積み、企画力、コミュニケーション力、指導力等を向上させる機会となった。
- 震災によって不登校等の状況に置かれている子どもたちが、元気を取り戻すサポートを行うことができた。
- 高校入試合格や、成績の向上が図られた。
- 沿岸各市町の学校や地域住民と、信頼関係を構築しながら実施を進めることができ、地域において、学習活動の定着化が図られた。

【学習面について】

- ・わからないところを積極的に聞いてきてくれてうれしかった
- ・1対1で丁寧に数学を教えた。

【相談面について】

- ・勉強とは関係ないことも話をしてくれた
- ・「将来何をやりたいかわからない」と言っていたが、色々なことに興味を示している様子なので、これからやりたいことを見つけてくれればいいと思った。
- ・小学校・中学校に仮設住宅が出来てから、外で遊ぶスペースが少なくなったので、外で遊ぶことが嫌いになったと聞いて、びっくりした。一緒に外で遊ぶ楽しさを教えたい。
- ・大学生活について、色々聞いてくれた生徒もいた。

【学生自身について】

- ・自ら進んで勉強している参加者の様子が分かり、私自身刺激を受けた。
- ・実際に沿岸の様子を見たり仮設住宅を訪れたりすることができ、参加できてよかった。
- ・初めてだったので、コミュニケーションが取り方が難しかったが、これからも支援ができたらいいなと思った。

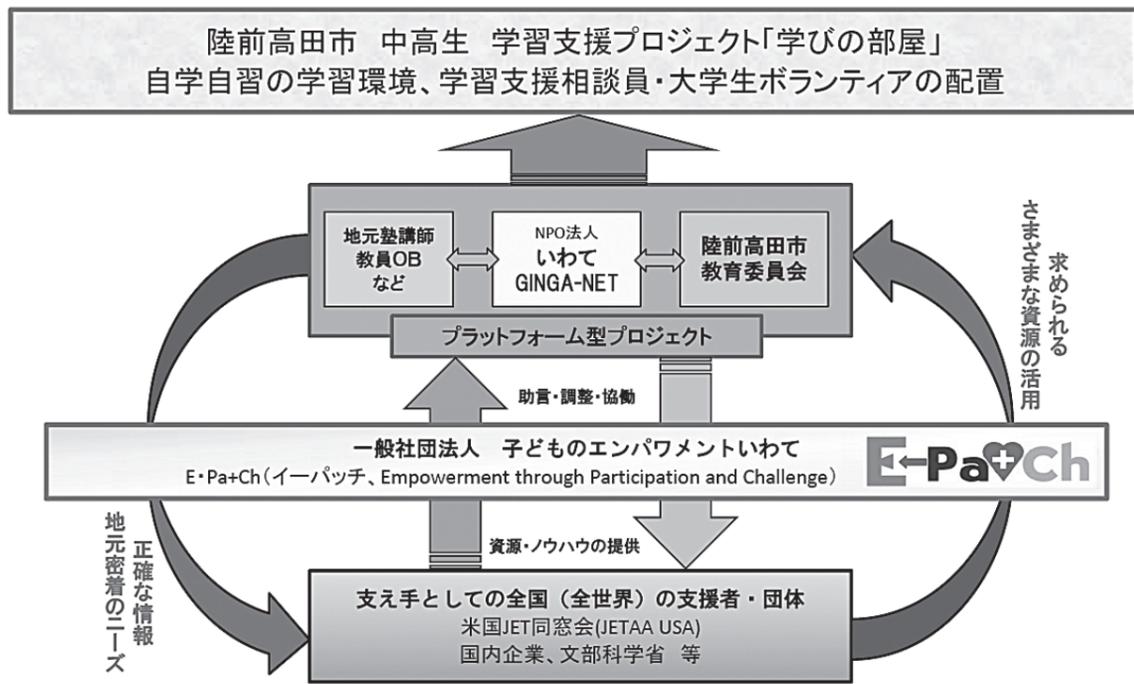
～学生生活日記より～

(3) 各市の実施事例

【平成27年度岩手県沿岸被災地における「学びの部屋」実施状況一覧（2015年10月現在）】

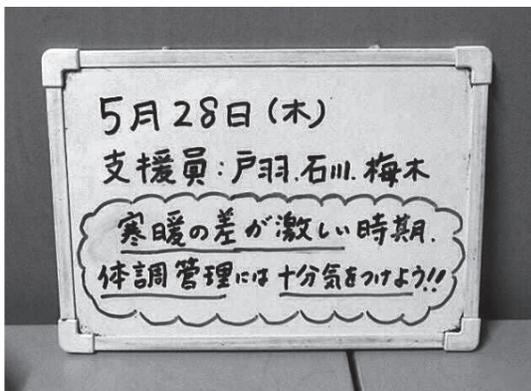


陸前高田市「学びの部屋」の事例【体制図】



【陸前高田市】

- 第一中学校 2011年11月スタート
開催日：毎週月～金、日曜日
時 間：平日 19:00～21:00 日曜・祝日 9:00～17:00
支援員：3名体制



- 米崎小学校 2011年11月スタート
開催日：毎週火・木曜日、日曜
時 間：平日 19:00～21:00 日曜・祝日 13:00～17:00
支援員：1名体制

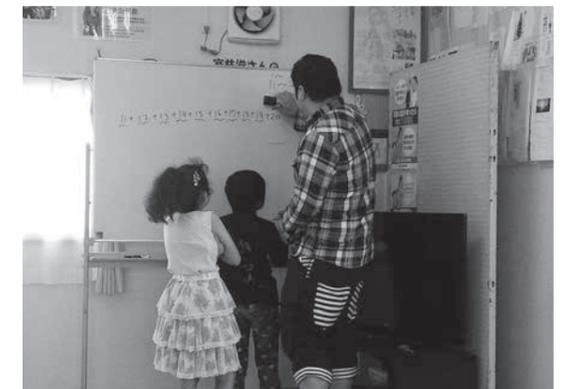
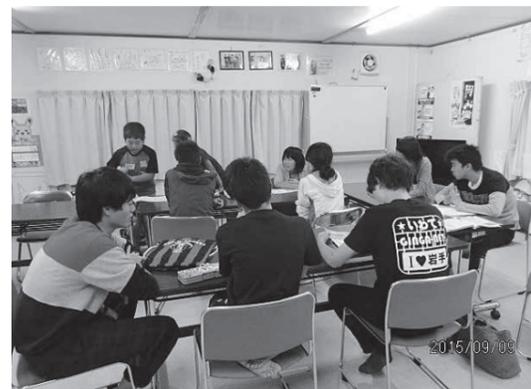


- 広田小学校 2011年11月スタート
開催日：毎週水・金曜日 時間：平日 19:00～21:00
支援員：1名体制



【大船渡市】

- 杉下仮設住宅 2012年9月スタート
開催日：毎週木曜日、隔週日曜日 時間：19:00～21:00
支援員：1名～2名体制



■大田仮設住宅 2013年7月スタート
 開催日：毎週月・火・木曜日 時間：19:00～21:00
 支援員：2名体制



【釜石市】
 ■唐丹中学校 2013年1月スタート
 開催日：毎週火・木曜日 時間：水・木 16:00～17:00
 支援員：2名体制



■小佐野地区公民館 2012年2月スタート
 開催日：期間限定
 時間：10:00～16:00



② 学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援 いわてGINGA-NETプロジェクトをはじめとする5年間の取り組み報告

1. いわてGINGA-NETプロジェクト（2011年度～2015年度）

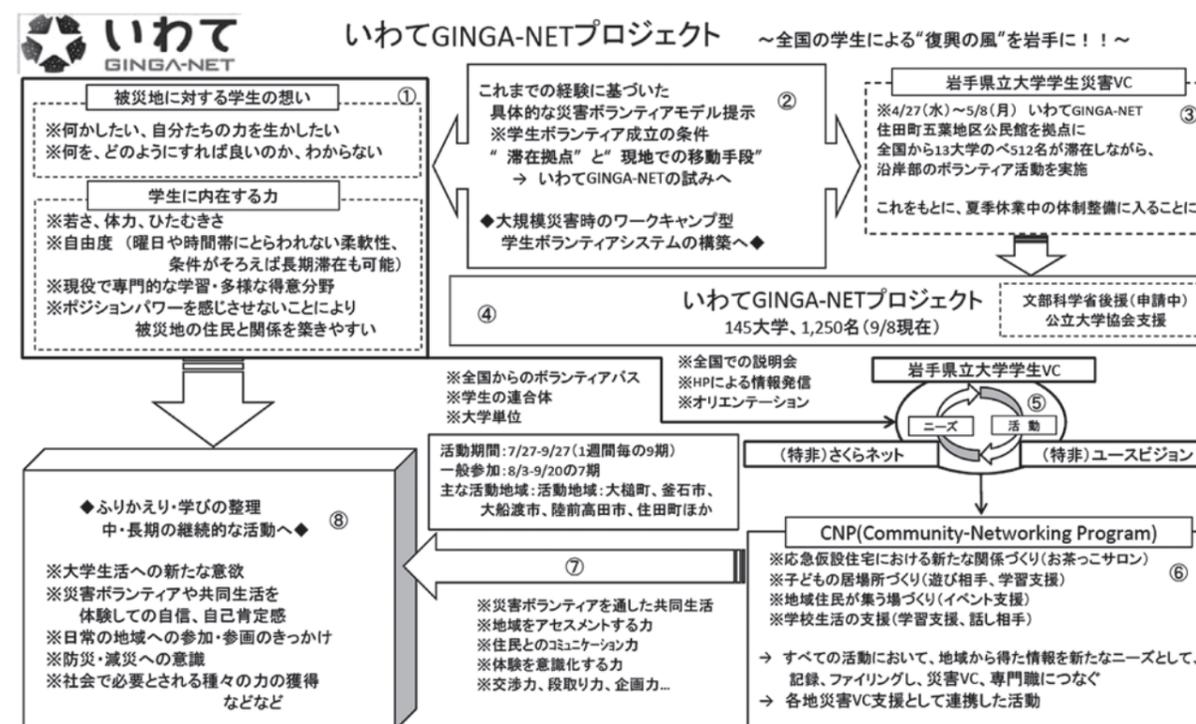
(1) いわてGINGA-NETプロジェクト結成の経緯

被災地の要支援ニーズと学生のボランティアニーズを効果的に結びつけるために、2011年夏に岩手県立大学、岩手県社会福祉協議会と、県外のNPOが連携し、「いわてGINGA-NETプロジェクト」（以下、GINGA）が結成された。具体的には、岩手県南部沿岸地域にアクセスのよい岩手県住田町を宿泊拠点として、全国から募った学生グループと岩手県内各地でのボランティア活動に参加する仕組みを、ネットワークを組んで進めていこう、という取り組みである。

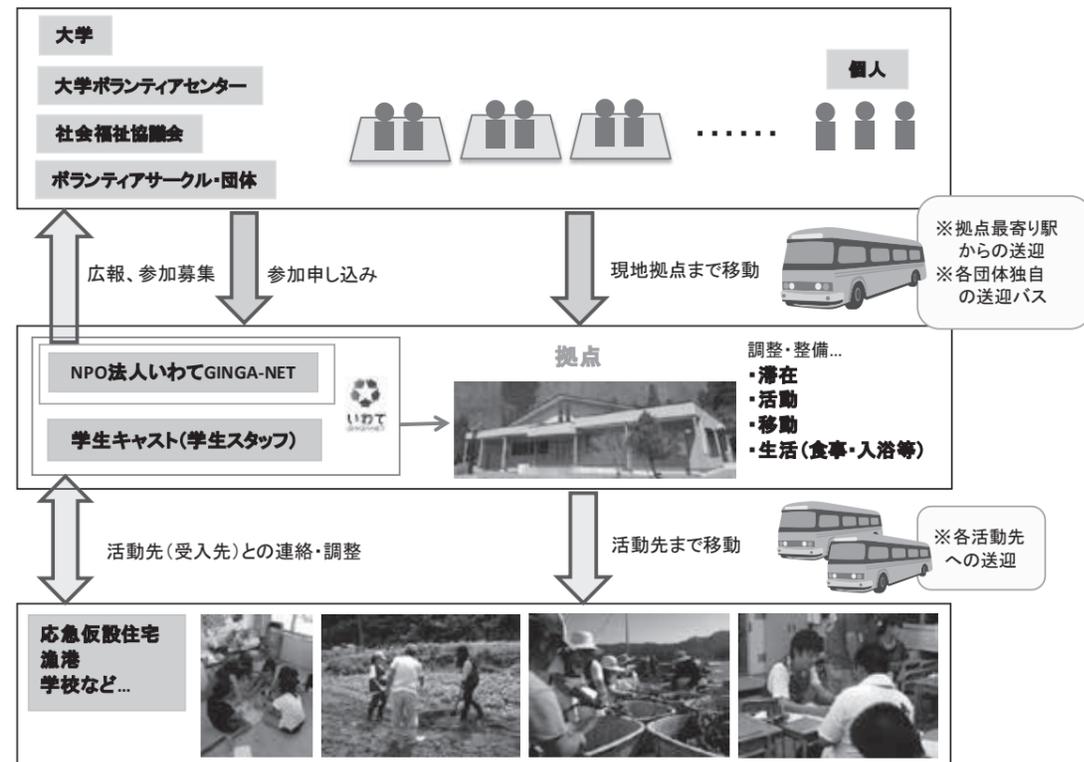
結成された当時、企画・運営にあたっては、岩手県立大学学生ボランティアセンターが、県内のボランティア活動プログラム開発、マッチングや宿泊サポートを、NPO法人ユースビジョン（京都府）及びNPO法人さくらネット（兵庫県）が、全国の大学ボランティアセンター、および学生ボランティア推進団体と連携して、学生ボランティアの募集と送り出しを行った。

この新たな災害支援モデルでは、2011年夏の実施期間（9週間）の間に、全国147大学から約1,300人の学生が岩手県に集まり、ボランティア活動に参加。その後、2012年2月にNPO法人いわてGINGA-NETを設立し、災害発生時における学生ボランティアの滞在拠点整備・運営、若者のマンパワーと地域のニーズをつなぐ仕組みとして2015年度までの5年間で計14回、延べ活動人数1万6千名が全国から参画している。

(2) 実施概要



2011.09.08 作成：山本克彦



■取り組みのプロセス

地域×学生
取り組みのプロセス



■“変わらないもの” — 私たちが伝え続けてきたメッセージ —

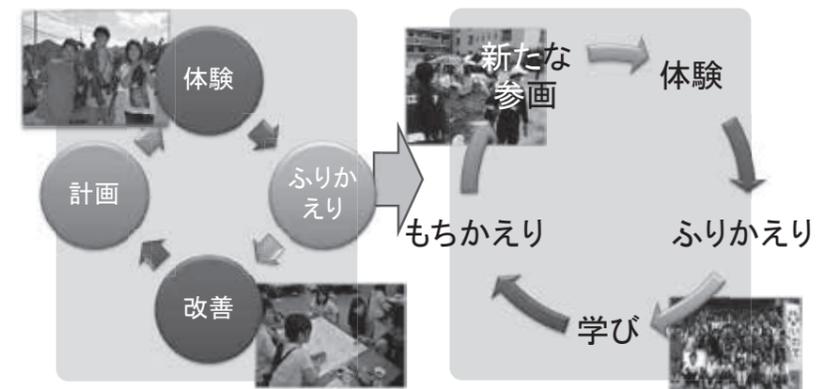
A message box contains the text:

- 東日本大震災で被災した地域とそこに生きる人たちのことを忘れずに、継続して支援してほしい。
- 岩手での経験をもちかえり、自分が生活する身近な地域で何が出来るかを考え、備えてほしい。

 Below the message is a photo of a large group of people sitting on the floor in a community gathering.

岩手での“体験”を“学び”へ
そして、次なる実践へ...

■学び、そして「もちかえり」へ...



(3) 実施状況

年度	プロジェクト	実施時期	参加人数
2011年度	(夏)	(全8期間)	(146校、1086名)
	冬銀河2011	第1期: 2011年12月28日～2012年1月4日	30校、43名
	春銀河2011	第1期: 2012年3月12日～3月18日 第2期: 2012年3月19日～3月25日	38校、83名
2012年度	夏銀河2012	第1期: 2012年8月08日～8月13日 第2期: 2012年8月15日～8月20日 第3期: 2012年8月22日～8月27日 第4期: 2012年8月29日～9月03日 第5期: 2012年9月05日～9月10日 第6期: 2012年9月12日～9月17日 第7期: 2012年9月19日～9月24日	87校、567名
	冬銀河2012	第1期: 2012年12月28日～2013年1月13日	16校、27名
	春銀河2012	第1期: 2013年3月12日～3月18日 第2期: 2013年3月19日～3月25日	32校、53名
	夏銀河2013	第1期: 2013年8月21日～8月26日 第2期: 2013年8月28日～9月02日 第3期: 2013年9月04日～9月09日 第4期: 2013年9月11日～9月16日 第5期: 2013年9月18日～9月23日	47校、307名(+キャスト28名)
2013年度	冬銀河2013	第1期: 2013年1月02日～1月06日	6校、9名
	春銀河2013	第1期: 2014年3月12日～3月17日 第2期: 2014年3月19日～3月24日	23校、7名(+キャスト15名)
2014年度	夏銀河2014	第1期: 2014年8月13日～8月25日 第2期: 2014年8月27日～9月08日 第3期: 2014年9月10日～9月22日	17校、89名
	冬銀河2014	第1期: 2014年12月25日～12月30日	3校、9名
	春銀河2014	第1期: 2015年2月19日～2月24日 第2期: 2015年2月26日～3月03日	15校、40名
2015年度	夏銀河2015	第1期: 2015年8月19日～8月28日 第2期: 2015年9月02日～9月11日	14校、44名
	春銀河2015	第1期: 2016年2月24日～2月29日 第2期: 2016年3月2日～3月7日	16校、54名

(4) 参加校一覧

地方	都道府県	大学名	
北海道	北海道	北星学園大学 北海道大学 北海道医療大学 藤女子大学	
	青森県	青森県立保健大学	
東北	岩手県	岩手県立大学 盛岡大学 富士大学	
	山形県	国立山形大学	
関東	群馬県	高崎健康福祉大学 高崎商科大学 前橋医療専門学校	
	埼玉県	埼玉医科大学 埼玉県立大学 女子栄養大学 聖学院大学 獨協大学 文教大学 埼玉大学大学院	
		千葉県	淑徳大学 千葉大学
			東京都

地方	都道府県	大学名		
関東	東京都	中央大学 帝京大学 東京学芸大学 東洋大学 日本大学 日本女子大学 日本放送協会学園 明治学院大学 明治大学 立教大学 立正大学 早稲田大学 ヤマザキ学園大学		
		栃木県	宇都宮大学	
		茨城県	筑波大学	
		神奈川県	神奈川大学 東洋英和女学院大学 横浜国立大学 フェリス学院大学	
			新潟県	新潟県立大学 新潟青陵大学短期大学部
			石川県	金沢大学
		山梨県	山梨県立大学	
		静岡県	静岡英和学院大学 浜松大学 静岡県立大学	
			愛知県	愛知県立大学 愛知淑徳大学 愛知大学 愛知教育大学 愛知学院大学 名古屋大学 名古屋短期大学 名城大学 日本赤十字豊田看護大学 金城学院大学 豊橋創造大学 名古屋商科大学 名古屋学芸大学 愛知県立芸術大学 椋山学園大学 中京大学 東海学園大学 名古屋外国語大学 名古屋市立大学 南山大学 日本福祉大学
		長野県		八ヶ岳中央農業実践大学校
岐阜県	朝日大学 岐阜聖徳学園大学 岐阜大学			
福井県	仁愛大学 福井県立大学			
三重県	三重県立看護大学 三重大学			

地方	都道府県	大学名				
近畿	滋賀県	滋賀県立大学 滋賀大学 滋賀医科大学 びわこ成蹊スポーツ大学				
	京都府	国立京都教育大学 佛教大学 京都精華大学 京都文教大学 京都文教短期大学 京都外国語大学 京都大学 京都女子大学 京都学園大学 花園大学 京都橋大学 京都産業大学 京都光華女子大学 京都工芸繊維大学 同志社大学 立命館大学 龍谷大学				
		大阪府	大阪経済大学 大阪市立大学 大阪大学 大阪府立大学 関西医科大学附属看護専門学校 関西外国語大学 関西学院大学 関西大学 常磐会学園大学 大阪女学院大学 大阪女学院短期大学 大阪樟蔭女子大学 近畿大学 摂南大学			
			兵庫県	甲南女子大学 甲南大学 流通科学大学 武庫川女子大学短期大学部 武庫川女子大学 園田学園女子大学 神戸親和女子大学 神戸市外国語大学 神戸市看護大学 神戸大学 神戸女子大学 神戸学院大学 神戸常盤大学		
				奈良県	帝塚山大学	
				和歌山県	和歌山大学 和歌山大学大学院	
				中国	島根県	島根県立大学 島根大学 島根リハビリテーション学院 島根県立大学短期大学部

地方	都道府県	大学名		
中国	岡山県	岡山理科大学 岡山大学 ノートルダム清心女子大学 吉備国際大学 岡山県立大学 美作大学 川崎医療福祉大学 吉備国際大学		
		広島県	県立広島大学 広島大学 広島工業大学 広島市立大学 広島経済大学 広島国際大学 広島修道大学	
			山口県	山口大学 山口県立大学
			徳島県	四国大学
			愛媛県	愛媛大学 松山大学
	高知県		高知県立大学 高知県立短期大学	
	九州	福岡県	北九州市立大学 九州大学 福岡教育大学 久留米大学 久留米工業大学 西南学院大学 福岡県立大学 福岡女学院大学 福岡女子大学大学院 福岡女学院看護大学 福岡女子大学 保健医療経営大学	
			大分県	大分大学
			宮崎県	航空大学校 宮崎県立看護大学 南九州短期大学 宮崎大学 宮崎公立大学
			アメリカ合衆国	オハイオ州 アンティオックカレッジ
カリフォルニア州			De Anza College	

計 209校

(5) 1期間の流れ (例:「夏銀河2015」)

日程	内容
01日目(水)13時集合	現地到着後、オリエンテーション
02日目(木)、03日目(金)	【復興の現状を知る・学ぶ】 フィールドワーク(地域やヒトとの出会い)
04日目(土)、05日目(日)	【「岩手の魅力」を発見する】 活動日(地域やヒトとの関わり) ※2日間
06日目(月)	【「岩手の魅力」を探しに行く】 フリータイム(グループ単位でプランを立てて行動します)
07日目(火)、08日目(水)	【「岩手の魅力」を発信する】 活動日(地域やヒトとの関わり) ※2日間
09日目(木)	ふりかえり(報告会・交流会)
10日目(金)11時解散	修了式後、出発

(6) 1日の流れ (例:「夏銀河2015」活動日、活動報告会)

時間	活動日	報告会
07:00	起床・朝食 清掃	
08:00	朝のオリエンテーション	
10:00	活動	ふり回り・まとめ (報告会に向けた準備)
15:00		
	入浴・買出し	
18:00	夕食	活動報告会・交流会
19:00	『共有・明日へつなぐ時間』 フリータイム	
22:00	就寝	

(7) 活動の様子



2. 週末ボランティアワークキャンプ (2013年度～2015年度)

(1) 実施状況

年度	プロジェクト	実施時期	参加人数
2013年度	2013GW 海と子どもとボランティア!	2013年5月03日～5月06日	2校、28名
	復活! 平田お祭りボランティア!	2013年5月18日～5月19日	2校、14名
	松倉お祭りボランティア	2013年7月28日	2校、8名
	昭和園お祭りボランティア	2013年9月28日	1校、7名
2014年度	2014GW 大槌子どもの遊び場ボランティア! ～「陣屋祭り」コラボ企画～	2014年5月04日、05日	2校、30名
	釜石・大槌“復興商店街”をめぐる! ～学生による復興支援活動、今後の展望を描く～		2校、6名
	スノーバスターズin西和賀 -浜っこ野球スポーツ少年団特別プログラム2015-	2015年1月31日～2月01日	2校、3名
2015年度	海から見る、“食”の魅力 ～ワカメ漁から、漁師に学ぶ～	2015年3月14日	2校、4名
	2015春 ボランティアを始めよう! ～復興グルメと漁業支援!～	2015年4月12日	3校、28名
	2015春 ボランティアを始めよう! ～ひまわりを植えよう!～	2015年5月10日	2校、4名
	2015秋 復興漁業体験ツアー ～岩手を知る・学ぶ・体験する!～	2015年11月28日～11月29日	1校、5名
	岩手の復興を知る・学ぶ・体験する 大学生と行く! 高校生沿岸ツアー	2015年12月19日	2校、9名 (+高校生:7校29名)
	ふわふわで遊ぼう! & お鍋で交流会 in 住田	2016年2月28日、3月6日	12校、27名 (+高校生:4校17名)

(2) 活動の様子



2011年から実施するサロン活動は、GINGAにおけるマッチング数（活動件数、活動者数）は徐々に減少しているがその背景としては、地域の自治力が高まり、サロン活動やイベントが地域で主体的に取り組まれるようになったことにある。サロン活動の場は、住民個々の声を聞く場となり、その後の支援・協働の展開につながっている。「漁業支援」や「商業復興支援」はそうした背景を持ち、開始当初は“支援”としての意味合いが強かったものの、現在では震災や地域について学ぶ機会をともに作り、活動をともに作り上げる関係へと発展している。

学生ボランティアの特徴として「住民との対等な関係性を築きやすい」「『被災者』『支援者』としてではなく、『伝え手』『受け取り手』として住民がエンパワメントされる機会を築きやすい」ことが言える。そうした特徴が、緊急支援期において生活やコミュニティに寄り添った支援の担い手として早期から支援活動をおこなうことができた要因の一つと考えられる。

「学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援」
5年間の移り変わり

■活動内容

東日本大震災	年度	2011年度	2012年度	2013年度～
RCF ロードマップ	期	緊急支援期	生活再建期	復興支援期
	期 間	発災から3ヶ月	～1年	～3年
	被災者の環境	避難所	応急仮設住宅	公営復興住宅
	主なニーズ	炊き出し、物資 泥かき、片付け	仮設住宅入居支援 広域避難者支援 生きがい・仕事づくり	コミュニティ活動支援 まちづくり支援
主な担い手	外部の組織 個人ボランティア	地元へ段階的に移行 個人からNPOへ	地元中心	
GINGA 学生活動内容	災害VC運営支援	○	-	-
	炊き出し	○	-	-
	遊び・学習支援	○	○	○
	コミュニティ形成支援	○	○	○
	漁業支援	-	-	○
	学習支援	-	-	○
	商業復興支援	-	-	○
農業支援	-	-	○	

3. 事業実施にご協力いただいた関係機関・団体（敬称略）

- 住田町
- 住田町教育委員会
- 住田町五葉地区
- 住田町食材研究会
- 岩手県沿岸各市町社会福祉協議会
- 特定非営利活動法人さくらネット
- 特定非営利活動法人ユースビジョン
- 一般社団法人子どものエンパワメントいわて
- 沢口製パン（パンカフェ）
- 釜石市両石漁師 久保
- 山田町漁師 佐々木
- 大槌町漁師 阿部
- 一般社団法人United Green
- その他、受け入れにご協力いただいた団体・個人のみなさま。

4. 「学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援」—5年間の移り変わり—

(1) 活動内容

東日本大震災の発災から時間の経過とともに、被災者の暮らしや生活環境は変化し、復興支援ボランティアに求められる役割や支援のあり方も多様化している。

GINGA活動スタート時は応急仮設住宅を中心としたコミュニティ支援を主な活動とし、現在では、商業復興支援や漁業支援等、被災地のニーズに即した支援活動を継続している。

(2) 参加動機

GINGAの参加学生に対する2012年度に実施した参加者アンケート（545名、回収率100%）と、2014年度に実施した参加者アンケート（78名、回収率100%）から、同じ変数である「GINGAへの参加動機」を抽出し、比較考察を行った。

2012年度の参加動機は「⑰被災地の状況を知りたいから」が多くを占めるが、「⑦自分の人格形成や成長」、「⑨困っている人を助けたいと思った」、「③地域や社会を知りたかった」、「⑫非営利活動や社会貢献活動というものに関心があった」を主な動機としている。また、2014年度の参加動機は「⑦自分の人格形成や成長につながることをしたかった」、「⑰被災地の状況を知りたいから」、「③地域や社会を知りたかった」、「④仲間づくりがしたかった」、「⑫非営利活動や社会貢献活動というものに関心があった」の順に回答が多かった。2012年度と2014年度の結果を比較考察すれば、「⑰被災地の状況を知りたいから」、「⑦自分の人格形成や成長につながることをしたかった」、「③地域や社会を知りたかった」の回答数の変化が少ないことがわかる。

東日本大震災における学生ボランティア活動の参加動機については、震災から3年半が経ち、求められる学生ボランティア活動のあり方は多様化してはいるが、「被災地の状況を知りたいから」と

回答をする学生が多い状況である。これは、2011年の発災当時は高校生であり、大学生となった現在、被災地を訪れる機会として、GINGAへ参加した動機を挙げている学生も多くいた（初参加56名中36名が回答。全体の64.3%となる）。

また、「自分の人格形成や成長につながることをしたかった」と回答した学生は、「全国の学生同士のつながりをもつこと」、「将来の方向性を明確にすること」など、GINGAに参加する学生は何かしらの目的（参加動機）が明確であることがわかる。さらに、今後も必ず起こるとされる大規模自然災害に備え、「今、岩手で起こっている課題が自分の地元でも近々生じてくることだと思う」との回答もあった。

また、一方でGINGAに参加した岩手県内の学生は「県外の人が岩手、または被災地をどのように思っているのか知ることができた」と、県外から参加した学生との関わりのなかで、被災地（岩手県）を客観的に知ることができたとの回答もあった。

「学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援」
5年間の移り変わり

■参加動機

順位	2012年度 参加動機	割合:545名中
1位	①被災地の状況を知りたいから	(81.7%):445名
2位	⑦自分の人格形成や成長につながることをしたかった	(65.0%):354名
3位	⑨困っている人を助けたいと思った	(46.2%):252名
4位	③地域や社会を知りたかった	(45.5%):248名
5位	⑫非営利活動や社会貢献活動というものに関心があった	(41.7%):227名

順位	2014年度 参加動機	割合:78名中
1位	⑦自分の人格形成や成長につながることをしたかった	(69.2%):54名
2位	①被災地の状況を知りたいから	(57.7%):45名
	③地域や社会を知りたかった	(57.7%):45名
4位	④仲間づくりがしたかった(2012年度:26.8%)	(48.7%):38名
5位	⑫非営利活動や社会貢献活動というものに関心があった	(47.4%):37名

5. 岩手からの「もちかえり」のその後—全国各地での展開—

「未災地ツアー」（高知県立大学：イケあい地域災害学生ボランティアセンター）

<http://www.u-kochi.ac.jp/~gakuseil/topics/1401-01.htm>

「リニモ沿線合同大学祭」（愛知県：リニモ沿線合同大学祭実行委員会）

<http://linimo.web.fc2.com/>

「DoNabenet in愛知」（愛知県：愛知県立大学）

<https://www.facebook.com/donabenet.inaichi?fref=ts>

「岩手・宮崎 大学生つながるプロジェクト」（宮崎県：岩手・宮崎大学生つながるプロジェクト）

<http://miyazaki-pcr.org/archives/583>

「うめえもん届け隊」（岩手県立大学：うめえもん届け隊）

<http://iwateginga.net/todoketai/>

③ 学生ボランティアを対象とした地域コミュニティ支援力養成
コミュニティ支援力養成研修会の開催報告

1. 事業概要

- ・今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向き合う学生を対象とした研修会
- ・災害支援のノウハウを学び、自分たちの地域活動に活かすために、学びのプログラムとして開催

2. 事業目的

- ・これまでの災害復興支援に学びこれからの防災・減災につなぐ
- ・災害という非日常を忘れることなく、日常のあり方を問い直す

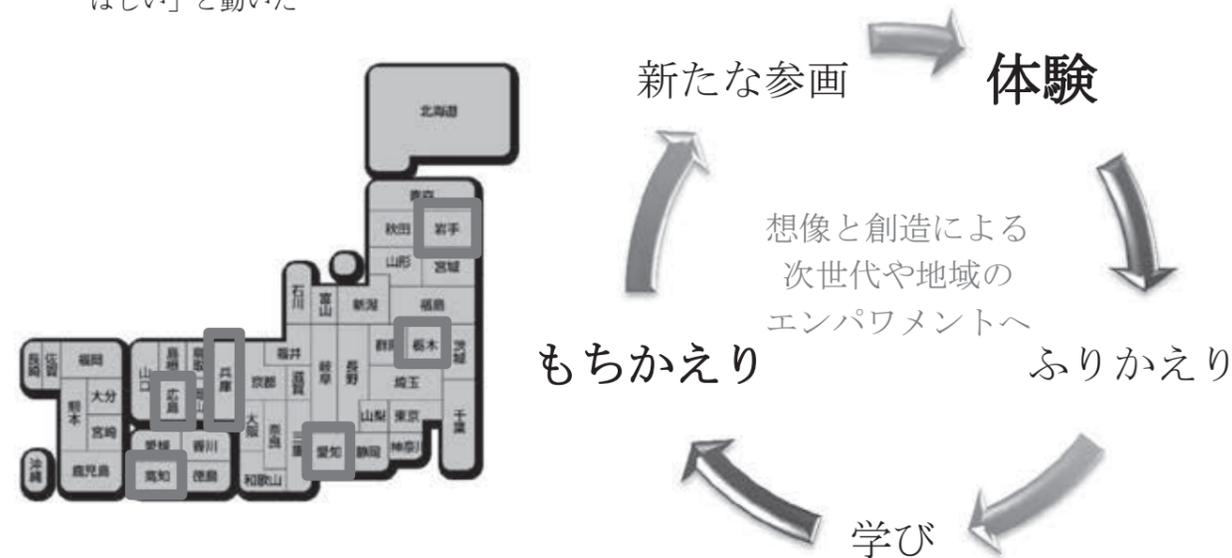
3. 実施回数・参加者数

- ・実施回数：8回・6カ所（2012年3月～2015年8月）
- ・321名が参加

4. コミュニティ支援力養成研修会 開催までの流れ ～研修会につながるオモイ～

* 東日本大震災前から、学生たちと共に活動を耕してきた歴史が研修会につながった

- ①2004年 新潟県中越地震
 - ・被災地（新潟県川口町）へ駆けつけ、「子ども支援」のボランティアを実施した
- ②2007年 新潟県中越沖地震
 - ・“学生”という支援者が長期的な災害ボランティア活動を実施した
 - ・約2カ月、現地滞在で学んだノウハウを蓄積した
- ③2008年 学生ボランティアセンター開設
 - ・「大学近隣地域の“ふだん”を支えることと、災害に対応できる力をつけたい」と動き出した
- ④2011年 東日本大震災
 - ・現地の災害ボランティアセンターの運営支援に動いた
- ⑤いわてGINGA-NETプロジェクト
 - ・「夏・冬・春と全国から集う学生たちが、災害支援のノウハウを学び、自分たちの地域に活かしてほしい」と動いた



第1回コミュニティ支援力養成研修会@岩手県
 【続ける力】【生み出す力】【備える力】【向き合う力】【見極める力】【つなぎつむぐ力】

【開催年月日】 2012年3月26日～28日

【参加者】 58人

【内 容】

- ・東日本大震災について学ぶ
- ・震災以降の若者の動きについて学ぶ
- ・学内拠点をどうつくるかを学ぶ
- ・災害時対応（時間の見直し）を学ぶ
- ・参加者の関係性を築くワークショップ
- ・災害復興支援からの学びを共有する
- ・地元に戻ったあと、日常からできる取り組みを描くグループワーク

【今後に向けた目標発表：「します宣言」】

- 学内にボランティアセンターをつくる
- ボランティアや支援することの大切さ、敷居の低さを伝える 等



第2回コミュニティ支援力養成研修会@岩手県
 大規模自然災害時の学生ボランティア組織化と拠点運営を学ぶ
 ～災害Vコーディネーターとは～

【開催年月日】 2012年8月5日～7日

【参加者】 16人

【内 容】

- ・ボランティア受入拠点の整備と体制について学ぶ
- ・拠点スタッフの体制・役割を検討する
- ・チームビルディングを行う
- ・拠点整備のために必要なものを検討し、買い出し・準備を行う
- ・拠点周辺のフィールドワーク・挨拶を行い、ボランティア受入体制を整える

【学生の様子】

- ・チームワークができてくると、モチベーションが上がり、意見・情報交換が活発になった



※今後の被災地支援や起こる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

東日本大震災 災害復興支援の体験から学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

これらの災害復興支援には何が求められているの？
 地域を支援することって？？
 災害ボランティアって何？
 もしも、自分の地域で大きな災害が起こったら...

日時：2012年3月26日(月)10時～3月28日(水)15時
 場所：国立岩手山青少年交流の家
 対象：東日本大震災で災害復興支援に関わった学生
 ※高等教育機関(大学、専門学校等)を原則とします

参加費 5,000円
 ※食費・宿泊費の実費

◆講師陣◆
 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議等
 東日本大震災の現地支援者

◆無料送迎バスのお知らせ◆
 京都、愛知、東京、岩手から無料送迎バスが運行されます。詳細は参加者あてご案内いたします。

【お問い合わせ】
 NPO法人 いわてGINGA-NET
 email: ginganet2012@gmail.com

【お申し込み・研修会の詳細】※先着150名
 いわてGINGA-NETプロジェクト公式HP
 http://www.iwateginga.net/

※この研修会は文部科学省事業として、岩手県立大学とNPO法人いわてGINGA-NETが実施しています。

コミュニティ支援力養成研修会(災害復興支援に関わる学生ボランティア合同)
 日程表
 3月26日(月)～28日(水)

時刻	3月26日(月)	3月27日(火)	3月28日(水)
7:00	前日出発		
8:00	※京都発:16時		
9:00	※名古屋発:18時		
9:30	※東京発:23時		
10:00	※五葉地区発(当日7時)		
10:30	朝食	朝食	朝食
11:00	ACT04:災害復興支援と学生の力	ACT07:プロジェクトのまとめから発表、相互の評価へ	
11:30	※参加学生による「熟議」 ※講師3名はアドバイザー	※提案をまとめ、プレゼン ※相互に助言しあう ※講師3名はアドバイザー	
12:00	昼食	昼食	昼食
12:30			
13:00	ACT02:東日本大震災に学ぶ	ACT05:災害復興支援の学びを日常へ	ふりかえり
13:30	※災害発生から被災地支援までの準備 ※支援者としての日常の備え	※参加から参加へ ※プロジェクト事例と企画について ※講師3名はアドバイザー	
14:00	※コースと活動のマッチングについて ※ニーズの変化と継続的な活動のあり方、ヒント		
14:30	◆赤澤清孝氏 ◆榎原辰二氏 ◆石井布紀子氏		
15:00	※3名それぞれ30分の発表と質疑 合わせて各1時間		
15:30			※東京～名古屋～京都の順で到着後、解散
16:00			
16:30			
17:00			
17:30	夕食・休憩	夕食・休憩	【講師】 赤澤清孝氏 (ユースビジョン) 榎原辰二氏 (ファミリーーターフェローズ、支援P) 石井布紀子氏 (さくらネット、支援P) ※3名とも、3.11以降 岩手県の支援に関わった方々 【サポート】 八重樫綾子 (NPO法人 いわてGINGA-NET) 浅石裕司 (一般社団法人 子どものエンパワメントいわて) 山本克彦 (岩手県立大学)
18:00			
18:30			
19:00	入浴など	入浴など	
19:30	ACT03:関係を築く時間	ACT06:関係を深める時間	
20:00	※ACT04の準備	※ACT05の情報共有	
20:30	※参加動機や活動紹介の ワークショップ	※講師3名はアドバイザー	
21:00	※講師3名はアドバイザー		
21:30			

※今後の被災地支援や起こる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

東日本大震災 災害復興支援の体験から学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

2011.03.11.14.46...あの瞬間を境に多くの人々の生活が一変しました。復興へ向かう地域やそこに生きる人々を支援しつつ、「想定外」と呼ばれたさまざまな事象から、私たちは「学ぶ」ということをしなければなりません。なぜならば、同様のあるいはそれ以上の大規模自然災害があなたの地域を襲うかもしれないからです。第1回でのテーマ、【続ける力】【生み出す力】【備える力】【向き合う力】【見極める力】【つなぎつむぐ力】に続き、今回は具体的な拠点整備と運営の仕組みづくりを、実際に使用する拠点において実施していきます。今後の災害に備える即戦力養成です。

研修拠点の下有住小学校旧校舎外観

日時：2012年8月5日(日)10時～8月7日(火)15時
 場所：住田町 下有住小学校旧校舎
 対象：災害復興支援に向け合う全国の学生
 ※高等教育機関(大学、専門学校等)を原則とします

参加費 5,000円
 ※食費・宿泊費の実費

◆講師陣◆
 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議等
 東日本大震災の現地支援者

◆無料送迎バスのお知らせ◆
 京都、愛知、東京と岩手を結ぶ無料送迎バスが運行されます。詳細は参加者あてご案内いたします。前後1日を移動日としてご予約を!

【お問い合わせ】
 NPO法人 いわてGINGA-NET
 email: ginganet2012@gmail.com

【お申し込み・研修会の詳細】※先着20名
 いわてGINGA-NETプロジェクト公式HP
 http://www.iwateginga.net/
 上記で表示されない場合は http://iwateginga.jimdo.com/

※この研修会は文部科学省事業として、岩手県立大学とNPO法人いわてGINGA-NETが実施しています。

コミュニティ支援力養成研修会(災害復興支援に関わる学生ボランティア合同)
 日程表
 8月5日(日)～7日(火)

時刻	8月5日(日)	8月6日(月)	8月7日(火)
7:00	前日出発		
8:00	※京都発:15時		
9:00	※名古屋発:18時		
9:30	※東京発:23時30分		
10:00	※住田町着:8時		
10:30	起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食
11:00	ACT05:現地巡回確認	ACT10:最終準備	ACT11:最終準備
11:30	※沿岸部各地の状況確認	※沿岸部各地の状況確認	※沿岸部各地の状況確認
12:00	ACT06:活動地域の現状把握	ACT07:拠点体制と運営	ACT08:拠点体制と運営
12:30	※生活と安心センタースタッフ ※審判アス	※中長期的支援の課題 ※拠点と体制 ※伝える情報の整理 ※具体的な活動(サッシュ)作業 ※拠点運営におけるソフト面の整備 ※到着から最終日までのシミュレーション	ACT09:関係と運営(90分) ACT10:関係と運営(90分) ACT11:関係と運営(90分)
13:00	昼食(現地に)	昼食(現地に)	昼食(現地に)
13:30			
14:00			
14:30			
15:00			
15:30			
16:00	WORK TIME	WORK TIME	WORK TIME
16:30	※到着～送り出しを頂き 具体的な作業を行う	※到着～送り出しを頂き 具体的な作業を行う	※到着～送り出しを頂き 具体的な作業を行う
17:00			
17:30			
18:00	入浴・夕食 (弁当または食費)	入浴・夕食 (弁当または食費)	入浴・夕食 (弁当または食費)
18:30	※五葉地区または種山遊林ランド	※五葉地区または種山遊林ランド	※五葉地区または種山遊林ランド
19:00			
19:30			
20:00	ACT04:講義と演習(90分)	ACT08:講義と演習(90分)	ACT09:講義と演習(90分)
20:30	※河田のどか氏 【伝える力】【発信する力】	【組み立てる力】【広める力】	【組み立てる力】【広める力】
21:00	ACT10:講義と演習(90分)	ACT11:講義と演習(90分)	ACT12:講義と演習(90分)
21:30	※河田のどか氏 【分析する力】【抽出する力】	【分析する力】【抽出する力】	【分析する力】【抽出する力】

※プログラムの内容は変更となる場合がございます。

第3回コミュニティ支援力養成研修会@愛知県 「地域における災害時の大学・学生の役割」

【開催年月日】 2013年3月8日～10日

【参加者】 67人

【内 容】

- ・美浜町の概要と防災体制について学ぶ
- ・エリアが近い仲間同士で災害発生直後、72時間対応について考えるワークショップ
- ・時系列でみた現地ニーズと学生ボランティアへの期待について学ぶ
- ・子どもを取り巻く環境と災害時の支援の可能性について学ぶ
- ・地元の方や大家さんと一緒に、車椅子などでのいざという時の避難方法を考える
- ・地域防災環境の聞き取りとフィールドワーク
- ・炊き出しやエアータント設置訓練
- ★「地域で何ができるか、仲間と何ができるか」について、キャラバンバス運行を想定した企画を立てるグループワーク 等



第4回コミュニティ支援力養成研修会@兵庫県

【過去から学び、未来へつなぐ】～兵庫・岩手・高知、復興の歩みから学ぶ～

【開催年月日】 2013年7月13日～14日

【参加者】 32人

【内 容】

- ・人と防災未来センター見学
- ・災害復興住宅に暮らす方々の取り巻く現状や課題について学ぶ
- ・神戸の復興と追悼を知るフィールドワーク
- ・復旧・復興の歩みを知るフィールドワーク
- ・兵庫、神戸、長田など、それぞれの地域の文化の特徴、形成の過程について学ぶ
- ・神戸のまち、自分のまちを考えるワーク

【次回研修会までの目標とアクション検討】

- 私たちがボランティアの方とHAT神戸の復興住宅に訪問・継続支援します！
- イケあい地域災害学生ボランティアセンターの仲間と十津の住民に避難所体験に参加してもらえるように働きかける！ 等



※今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

東日本大震災 災害復興支援の体験から学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

第3回となる研修会のテーマは「地域における災害時の大学・学生の役割」です。第1回でのテーマ、「続ける力」「生み出す力」「備える力」「向き合う力」「見極める力」「つなぐつむぐ力」に続き、第2回は具体的な拠点整備と運営の仕組みづくりを学びました。そこで今回は、東海地震発生を想定し、被災した地域の支援拠点となる大学や周辺施設を活用した大規模なシミュレーションを実施します。

愛知県知事半島の美浜町を会場とし、海沿いの地域の避難所となる海抜26mの日本福祉大学キャンパス等を活用させていただきます。災害発生時から避難所、応急仮設住宅へと時間の経過とともに変化する支援について、みなさんで考えてみましょう。

大学での炊き出し風景(2012年)

日時:2013年3月8日(金)12時～3月10日(日)14時
場所:日本福祉大学(宿泊は愛知県美浜少年自然の家等)
対象:災害復興支援に向け合う全国の学生
※高等教育機関(大学、専門学校等を原則とします)

参加費 7,000円
※食費・宿泊費の実費

内容
■災害発生から72時間、被災地での大学の役割。
■避難所から応急仮設住宅へ、コミュニティ形成時期における支援を学ぶ。
■東日本大震災の経験から、学生ボランティアによる子ども支援を考える。
■東海地震想定でのアウトリーチとニーズキャッチを体験する。
■災害復興支援活動を支えるファンドライズを考える。
■避難所設置運営と炊き出し体験 等

◆講師陣◆
災害ボランティア活動支援プロジェクト会議
児童健全育成推進財団等
東日本大震災の現地支援者

◆無料送迎バスのお知らせ◆
関西、東北から2コース
無料送迎バスが運行されます。
詳細は参加者宛にご案内いたします。

【お問い合わせ】
NPO法人 いわてGINGA-NET
email:ginga-net2012@gmail.com

【お申し込み・研修会の詳細】※先着50名
NPO法人 いわてGINGA-NET公式HP
http://www.iwateginga.net

※本研修会は文部科学省事業として、岩手県立大学と日本福祉大学、NPO法人いわてGINGA-NETが実施しています。

	3月8日(金)	3月9日(土)	3月10日(日)
6:30	コースA * 岩手発:22時(前日) * 東京発:06時 コースB * 神戸発:06時 * 大阪発:07時 * 京都発:08時	起床 朝の集い 朝食 移動	起床 朝食 地域資源の活用
		□Activity-06 子どもを取り巻く環境と 災害時の支援の可能性	□Activity-13 つながりとひろがりの時間
		□Activity-07 近隣地域フィールドワークのヒントと 炊き出しの流れ	
12:00	昼食持参	昼食 地域資源の活用	昼食 地域資源の活用
	□Activity-01 全体オリエンテーション	□Activity-08a 地域を知るフィールドワーク体験	□Activity-14 全体ふりかえり
	□Activity-02 美浜町の概要と既存の防災体制等	□Activity-08b 地域協働型の炊き出し体験	* 現地発:14時
	□Activity-03 災害発生からの72時間を考える		
	移動		* 京都解散:17時30分
18:00	施設オリエンテーション	□Activity-09 炊き出し(食事)場面の共有	
	夕食		* 大阪解散:18時30分
	入浴	入浴 地域資源の活用	* 東京解散:19時00分 * 神戸解散:19時30分
	□Activity-04 大規模自然災害と学生ボランティア	□Activity-10 大学と地域のつながり考える	
	□Activity-05 時系列で見た現地ニーズと 学生ボランティアへの期待	□Activity-11 DoNabenetのねらいと効果	
21:00	就寝	就寝 体育館にて避難所体験	* 岩手解散:09時00分(翌日3/11)

※プログラムは変更となる場合があります。

※今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

東日本大震災 災害復興支援の体験から学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

第4回となる研修会のテーマは、
【過去から学び、未来へつなぐ】
～兵庫・岩手・高知、復興の歩みから学ぶ～

第1回でのテーマ、「続ける力」「生み出す力」「備える力」「向き合う力」「見極める力」「つなぐつむぐ力」に続き、第2回は具体的な拠点整備と運営の仕組みづくりを学びました。第3回は、東海地震発生を想定し、被災した地域の支援拠点となる大学や周辺施設を活用した大規模なシミュレーションを実施しました。

今回は、阪神・淡路大震災から18年が経過した、兵庫県神戸市を会場とします。災害発生、避難所、応急仮設住宅、そして復興住宅…。人々の生活・環境とともに変化する、コミュニティ、神戸のまちで復旧・復興、支援について、みなさんで考えてみましょう。

日時:2013年7月13日(土)11時～7月14日(日)16時
場所:神戸市内・兵庫県立大学、人と防災未来センター、長田商店街、新長田他
(宿泊は神戸セミナーハウス)
対象:災害復興支援に向け合う全国の学生
※高等教育機関(大学、専門学校等を原則とします)

参加費 7,000円
※食費・宿泊費の実費

内容
■震災から3～5年目の復旧・復興期のニーズを探る
■震災の風化防止について知る
■まちの再生に向けた地域の取り組みについて学ぶ
■復興住宅のコミュニティ形成について学ぶ
■若者に支えられた震災当時子どもたちの声を聴く 等

◆講師陣◆
神戸の復旧・復興に携わっているNPOや地域関係者等
東日本大震災の現地支援者

◆無料送迎バスのお知らせ◆
名古屋、高知から2コース
無料送迎バスが運行されます。
詳細は参加者宛にご案内いたします。

【お問い合わせ】
NPO法人 さくらネット
email:cm2013_kobe@yahoo.co.jp

【お申し込み・研修会の詳細】※先着60名
NPO法人 いわてGINGA-NET公式HP
http://www.iwateginga.net

※本研修会は文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」として、岩手県立大学と兵庫県立大学、NPO法人いわてGINGA-NET、NPO法人さくらネットが協働で実施しています。

第4回 コミュニティ支援力養成研修会
日程表(案)

時刻	7月13日(土)	7月14日(日)
7:00		朝食
8:00		
8:30	※6:00 高知駅出発	
9:00	※7:00 名古屋駅出発	
	※東北組、前日飛行機で移動	
10:00		
10:30	受付(人と防災未来センター)	□Activity-06 復旧・復興の歩みを知るフィールドワーク 復旧・復興から現在に至るまでのコミュニ ティ (長田神社前商店街)
11:00		
11:30	□Activity-01 全体オリエンテーション チームビルディング	
12:00		移動・昼食 地域資源の活用
12:30		
13:00	昼食 地域資源の活用	
13:30		□Activity-07 気づきの積み重ねのための情報発信 ～明日へのシミュレーションのために (NPO法人 エフエムわいわい)
14:00	□Activity-02 人と防災未来センター見学	
14:30		
15:00		□Activity-08 全体のまとめ
15:30		
16:00	□Activity-03 「希望への書簡」 阪神・淡路大震災から18年 人々の生活と支援の変化を考える	記念撮影(鉄人28号)・終了
16:30		
17:00	(NPO法人 よろず相談室)	※各地へのバス出発
17:30		
18:00	夕食 地域資源の活用	
18:30	移動	
19:00	□Activity-04 神戸の復興と追悼を知るフィールドワーク * 自由散策 * 市役所屋上展望台(ルミナリエの写真) * 東遊園地(ルミナリエ、1.17会場)	
19:30		
20:00	宿舎に移動	
20:30		
21:00	入浴など	
21:30		
22:00	□Activity-05 ふりかえりの時間	
22:30		
23:00	就寝	

第5回コミュニティ支援力養成研修会@高知県
 【災害時をイメージし、備えを考える】
 ～地域を感じ、想像力と創造力を発揮してみよう！～

【開催年月日】 2014年3月8日～9日

【参加者】 42人

【内 容】

- ・南海地震を知る
- ・美里地区、御豊瀬地区のフィールドワーク
- ・津波避難タワーの見学
- ・東日本大震災の事実から高知県未災地での学びを深める
- ・南海トラフ地震で地盤沈降により浸水する高知市内を見学
- ・災害図上訓練により、南海トラフ地震への備えを考えるグループワーク
- ・南海トラフ地震発生を想定し、高知県内の大学を活かした支援体制について考えるグループワーク



第6回コミュニティ支援力養成研修会@栃木県
 隣接地の拠点形成とボランティアコーディネート
 ～首都直下地震、その時、何をすべきか！～

【開催年月日】 2014年10月12日～13日

【参加者】 55人

【内 容】

- ・東日本大震災発災当時何をし、どのような行動をとったか、振り返りながら互いを知る
- ・首都直下地震の発生を想定し、発災時の自分自身の行動や働きかけを時系列にイメージするグループワーク
- ・東日本大震災の避難者受入、避難所運営を知る
- ・災害時の隣接支援と遠距離支援を知る



【防災や減災をテーマに、平時における地域での活動を考える】
 →DoNabernet in日福
 →学校に泊まろう～みんなのまわりにはどんなひとが住んでるの？～ 等

※今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

東日本大震災 災害復興支援の体験から学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

第5回となる研修会のテーマは、
【災害時をイメージし、備えを考える】
～地域を感じ、想像力と創造力を発揮してみよう！～
第1回でのテーマ、【続ける力】【生み出す力】【備える力】【向き合う力】【見極める力】【つなぐ力】【つなぐ力】に続き、第2回は具体的な拠点整備と運営の仕組みづくりを学びました。第3回は、東海地震発生を想定し、被災した地域の支援拠点となる大学や周辺施設を活用した大規模なシミュレーションを実施しました。第4回は、阪神・淡路大震災から18年が経過した神戸のまちの復旧・復興、支援の取り組みを学びました。
5回目となる今回は、南海・東南海地震の発生による大規模な被害が想定されている高知県の高知県立大学を会場とします。未来の被災地となる高知県、「未災地」の高知の姿から、災害発生前、災害発生時、そして災害発生後、何が必要か、何ができるか、時間の経過と共に変化する状況・支援をイメージし、みなさんで考えてみましょう。

日時：2014年3月8日(土)11時～3月9日(日)15時
 場所：高知県高知市内・高知県立大学地キャンパス 他
 対象：災害復興支援に向け合う全国の学生

参加費 3,000円
 ※食費・宿泊費の実費

※高等教育機関(大学、専門学校等)を原則とします)

内容
 ■災害発生から72時間、被災地での大学の役割を考える。
 ■南海・東南海地震発生時の学生ボランティアの連携の可能性を探る
 ■南海地震での被害想定を知る
 ■DIGを使ったフィールドワーク
 ■避難所設置・運営体験等

【持ち物】
 ※筆記用具
 ※1泊2日の生活用品
 ※寝袋等
 (体育館宿泊のため)

◆無料送迎バスのお知らせ◆
 京都、神戸から無料送迎バスが運行されます。
 出発：京都発 3/8 06:00、神戸発 07:20
 解散：神戸着 3/9 18:40、京都着 20:00
 上記の発着時刻は予定です。
 詳細は参加者宛にご案内いたします。

【お問い合わせ】
 NPO法人 さくらネット
 email: cm2013_kobe@yahoo.co.jp

【お申し込み・研修会の詳細】 定員70名
 NPO法人 いわて GINGA-NET 公式HP
 http://www.iwateginga.net

※本研修会は文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」として、岩手県立大学と高知県立大学、NPO法人いわて GINGA-NET、NPO法人さくらネットが協働で実施しています。

第5回 コミュニティ支援力養成研修会
日程表

時刻	3月8日(土)	3月9日(日)
6:00		早朝桂浜ツアー
7:00		五台山見学(高知市街地を一望できる)
8:00	※関西出発	
8:30		
9:00	※東北組、前日飛行機で移動	
10:00		
10:30	受付(人と防災未来センター)	□Activity-08 ワークショップ
11:00		
11:30	□Activity-01 開会(学長挨拶)	
12:00	オリエンテーション	
12:30		昼食・休憩
12:45	□Activity-02	
13:00	講義 「南海地震を知る」高知県南海地震対策課	
13:30		□Activity-09 ふりかえり・閉会式
14:00	□Activity-03 三豊地区フィールドワーク	
14:30		
15:00	□Activity-04 県営渡船で御豊瀬へフィールドワーク	
15:30		
16:00	□Activity-05 夕食(非常食)	
16:30		
17:00		
17:30	入浴(ぼかぼか温泉)	
18:00		
18:30		解散 ※各地へのバス出発
19:00	移動	
19:30		
20:00	□Activity-06 ワークショップ	
20:30		
21:00		
21:30		
22:00	□Activity-07 ふりかえりの時間	
22:30		
23:00	就寝	

※今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

東日本大震災 災害復興支援の体験から学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

第6回となる研修会のテーマは、
隣接地の拠点形成とボランティアコーディネート
～首都直下地震、その時、何をすべきか！～

東日本大震災の被災地、岩手県での開催にはじまり、愛知県、兵庫県、高知県と、すでに5回の研修を重ねてきました。これまでの被災地や、その復興に学び、未来の災害に備えること...それは、自分たちの地域でふたんのくらしのあわせ」を大切に過ごすことにほかなりません。

今回は首都直下地震の際に、隣接する地域として支援拠点となる宇都宮大学を会場に、拠点形成とボランティアコーディネートについて学びます。

日時：2014年10月12日(日)13時～10月13日(月・祝)15時
 場所：宇都宮大学とその周辺
 対象：災害復興支援に向け合う全国の学生
 ※高等教育機関(大学、専門学校等)を原則とします)
 ※宿泊は栃木県芳賀青年の家

参加費 4,000円
 ※食費・宿泊費の実費

内容
 ■首都直下地震の被害想定を描く
 ■隣接地域のボランティア拠点の実際を知る
 ■現地災害ボランティアセンターの課題を学ぶ
 ■近隣のフィールドワーク
 ■災害発生に備えた大学間連携の可能性を描く

【持ち物】
 ※筆記用具
 ※1泊2日の生活用品

◆無料送迎バスのお知らせ◆
 岩手から無料送迎バスが運行されます。
 出発10/12：盛岡発 06:00
 解散10/13：盛岡着 21:00
 上記の発着時刻は予定です。

【お問い合わせ】
 NPO法人 さくらネット
 e-mail: cm2013_kobe@yahoo.co.jp

【お申し込み・研修会の詳細】 定員70名
 NPO法人 いわて GINGA-NET 公式HP
 http://www.iwateginga.net

※本研修会は文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」として、岩手県立大学と宇都宮大学、NPO法人いわて GINGA-NET、NPO法人さくらネットが協働で実施しています。

第6回 コミュニティ支援力養成研修会
日程表

時刻	10月12日(土)	10月13日(日)
6:00	岩手県立大学 出発 盛岡駅前ルートイン前 出発	
7:00		起床・施設清掃
7:30		朝食
8:30		芳賀青年の家 出発
9:30		□Activity-05 「栃木県におけるジェンダーに配慮した避難所に向けた取り組み紹介」 講師：長谷川氏(宇都宮大学)
10:30		□Activity-06 「災害時の隣接支援と遠距離支援」 講師：日野氏(越谷市社会福祉協議会)
12:20	国立宇都宮大学 到着	
12:30	受付	
13:00	開会挨拶	昼食
13:10	□Activity-01 全体オリエンテーション	
13:30	□Activity-02 ワークショップ	
14:00	「隣接地支援コーディネーション」 講師：山本氏(日本福祉大学)	□Activity-07 振り返りワークショップ 講師：石井氏(NPO法人さくらネット)
14:20	休憩	
14:30		国立宇都宮大学 出発
15:00	□Activity-02の続き	盛岡駅前ルートイン前 到着
15:30		
16:00	移動	岩手県立大学 到着
17:00	※途中、ロマンの湯にて入浴	
18:00		
18:15	到着	
18:30	夕食	
19:15	□Activity-03 講義「避難拠点の経験」 講師：添谷氏(芳賀青年の家の職員)	
19:30		
20:00		
20:30	□Activity-04 交流会	
21:00		
21:30	自由時間	
23:00	消灯・就寝	

第7回コミュニティ支援力養成研修会@広島県 災害ボランティアセンター運営支援を考える！～広島土砂災害の現場に学ぶ！～

【開催年月日】 2015年3月8日～9日

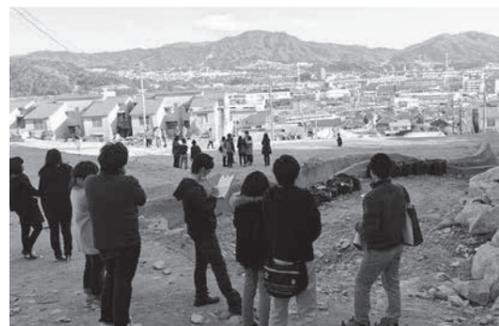
【参加者】 33人

【内 容】

- ・広島土砂災害の被害の概要について知る
- ・安佐南区八木地区のフィールドワークを行い、被災当時の状況と現在の様子を知る
- ・災害時の学生による活動に学ぶ（災害VC運営支援、子ども支援、地域との連携など）
- ・全国の学生の日常の取り組みについて知る

【全国の学生ネットワークの展開を考える】

→日常から意見交換や情報交換ができるSNSグループを立ち上げる



第8回コミュニティ支援力養成研修会@岩手県 これからの学生によるコミュニティ支援を展望する ～震災から5年目、岩手県沿岸地域の“ひと”と“暮らし”に学ぶ～

【開催年月日】 2015年8月8日～9日

【参加者】 16人

【内 容】

- ・東日本大震災発生からの流れを振り返る
- ・釜石観光ボランティアガイドの案内で、釜石市内の巡回
- ・当時の様子や被災、復興状況などについて知る
- ・仮設住宅引越支援について考えるグループワーク（引越し前日の時間をどう使うか）

【今後のボランティア活動に向けて、「わたしのI wish」を発表】

- 笑顔に隠れた寂しさを会話から見つける
- 被災地に関心を持つ仲間を増やす
- 自分から会話を広げる、中身のある会話



※今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

大規模自然災害における「現場」に学ぶ コミュニティ支援力養成研修会

第7回となる研修会のテーマは、
災害ボランティアセンター運営支援を考える！
～広島土砂災害の現場に学ぶ！～

東日本大震災の被災地、岩手県での開催にはじまり、愛知県、兵庫県、高知県、栃木県と、すでに6回の研修を重ねてきました。これまでの被災地や、その復興に学び、未来の災害に備えること…それは、自分たちの地域で「ふだんのくらしのしあわせ」を大切に過ごすことにほかなりません。

今回は2014年8月20日に発生した広島土砂災害の現場を歩き、あの時、何が起り、学生たちはどう動いたか、災害VCでの学生の役割を確認します。

日時：2015年3月8日（日）13時～3月9日（月）15時
現地集合の場合は直接、広島修道大学セミナーハウスに13時までにお願いします。
場所：広島修道大学・安佐北区総合福祉センター
対象：災害復興支援に向け合う全国の学生
※高等教育機関（大学、専門学校等）を原則とします
※宿泊は広島修道大学セミナーハウス

参加費 3,000円
※食費・宿泊費の実費

【持ち物】
■筆記用具
※1泊2日の生活用品
※その他、必要と思われるもの

◆無料送迎バスのお知らせ◆
三宮（神戸市）から無料送迎バスが運行されます。
出発3/8：三宮駅発 08:30
解散3/9：三宮駅着 19:30
上記の発着時刻は予定です。
場所等詳細は参加者宛にご案内いたします。

【お問い合わせ】
NPO法人 さくらネット
email: cm2013_kobe@yahoo.co.jp

【お申し込み・研修会の詳細】 定員70名
NPO法人 いわてGINGA-NET公式HPにて「15.01.25受付開始」
http://www.iwatetinga.net

※本研修会は文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」として、岩手県立大学と広島修道大学、NPO法人いわてGINGA-NET、NPO法人さくらネットが協働で実施しています。

時刻	3月8日(日)	3月9日(月)
7:00		起床・朝食
9:00		チェックアウト
10:00		
10:30	※関西バス出発	□Activity-04 広島土砂災害を知る② 災害時の学生による活動に学ぶ (災害VC運営支援、子ども支援、地域との連携など)
11:00		
11:30		昼食・近隣散策
12:00		□Activity-05 まとめ・今後の展開
13:00	広島修道大学 到着	
13:30	□Activity-01 オリエンテーション 広島土砂災害を知る① フィールドワーク準備 諸注意	
14:00		ふりかえり 広島土砂災害の現場を学ぶ 全国の学生ネットワークの展開を考える
14:30		
14:40		
15:00	□Activity-02 現地を感じながら理解する 現場で問いを発見する	
15:30		
16:00		
16:30	移動 ※現地災害VCの位置や活動中、 生活に必要な社会資源を考える	
17:00		
17:30	入浴 買い物タイム	
18:00		
18:30	移動	解散
19:00		
19:30		
20:00	セミナーハウス到着	
20:30	□Activity-03 夕食・交流会	
21:00		
21:30		
22:00		就寝

※今後の被災地支援や起こりうる自然災害、日常の防災・減災活動に向け合う学生を対象とした研修会です。

学生によるコミュニティ支援の未来を展望する コミュニティ支援力養成研修会

第8回となる研修会のテーマは、
これからの学生によるコミュニティ支援を展望する
～震災から5年目、岩手県沿岸地域の“ひと”と“暮らし”に学ぶ～

東日本大震災の被災地、岩手県での開催にはじまり、愛知県、兵庫県、高知県、栃木県、広島県と、7回の研修を重ねてきました。これまでの被災地や、その復興に学び、未来の災害に備えること…それは、自分たちの地域で「ふだんのくらしのしあわせ」を大切に過ごすことにほかなりません。

今回は本研修会の原点である岩手県の沿岸地域をフィールドに、震災から5年目を迎えた地域で暮らす人々の“いま”を横へ、地域復興の現実を見つめます。コミュニティの再生に向け合ってきた学生たちの動きを振り返りつつ、「これから」の若者によるコミュニティ支援のあり方について語り合います。

日時：2015年8月8日（土）11時半～8月9日（日）15時
場所：五葉地区公民館（住田町上住中埠63）
対象：災害復興支援に向け合う全国の学生
※高等教育機関（大学、専門学校等）を原則とします

参加費 3,000円
※食費・宿泊費の実費

【持ち物】
■復旧袋（又は体育館・公民館で就寝します）
※筆記用具
※1泊2日の生活用品

◆無料送迎バスのお知らせ◆
盛岡駅前から無料送迎バスが運行されます。

出発：8/8(土)
盛岡駅前発08:30 → 花巻駅前発09:30 → 五葉地区公民館着11:00
解散：8/9(日)
五葉地区公民館発15:30 → 花巻駅前発17:00 → 盛岡駅前着18:00
上記の発着時刻は予定です。
詳細は参加者宛にご案内いたします。

【お問い合わせ】
NPO法人 さくらネット
email: cm2013_kobe@yahoo.co.jp

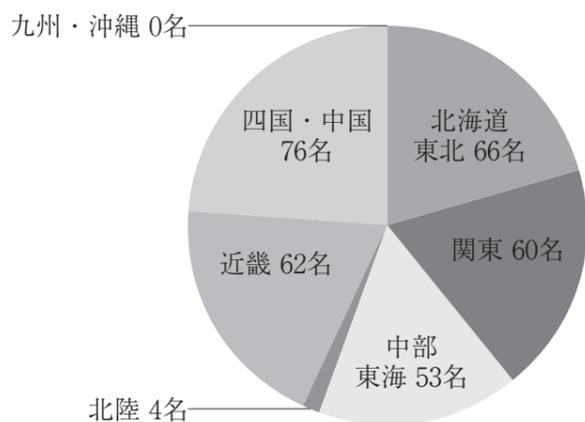
【お申し込み・研修会の詳細】 定員70名
NPO法人 いわてGINGA-NET公式HP
http://www.iwatetinga.net

※本研修会は文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」として、岩手県立大学とNPO法人いわてGINGA-NET、NPO法人さくらネットが協働で実施しています。

時刻	8月8日(土)	8月9日(日)
7:30		起床・朝食 ※朝食(パン、飲料)を配布
8:30	【送迎バス】盛岡駅前 発	
9:00		□Activity-08 「災害復興支援の学びを日常へ」 ※参加者から参画へ
9:30	【送迎バス】花巻駅前 発	
11:00	【送迎バス】五葉地区公民館 着 受付	
11:30	□Activity-01 主催者挨拶・全体オリエンテーション	昼食
12:00		昼食
12:30	□Activity-02 「東日本大震災の“これまで”に学ぶ」 ※災害発生から復興支援まで ※学生ボランティアの取組み(事例紹介)	□Activity-09 「学生ネットワークづくりに向けて」② ※岩手県での学生相互のつながり、 全国とのつながりについて考える
13:00		
13:30	移動	
14:00	□Activity-03 「震災から5年目を迎えた 地域で暮らす人々の“いま”を知る」 ※沿岸地域フィールドワーク ※地域復興の現実 ※語り部によるガイド	□Activity-10 ふりかえり・閉会式
14:30		
14:40		
15:00		
15:30		終了・解散
16:00	入浴	【送迎バス】花巻駅前 着
16:30		【送迎バス】盛岡駅前 着
17:00	五葉地区公民館 着	
17:30	□Activity-04 「地元住民との交流」 ※住田町食材研究会との協働による交流会	
18:00		
18:30		
19:00		
19:30		
20:00	□Activity-05 「復興との“寄り添い”における学生の力」 ※参加者による「熟議」	
20:30		
21:00	□Activity-06 「学生ネットワークづくりに向けて」① ※岩手県での学生相互のつながり、 全国とのつながりについて考える	
21:30		
22:00		
22:30	□Activity-07 就寝	

まとめ

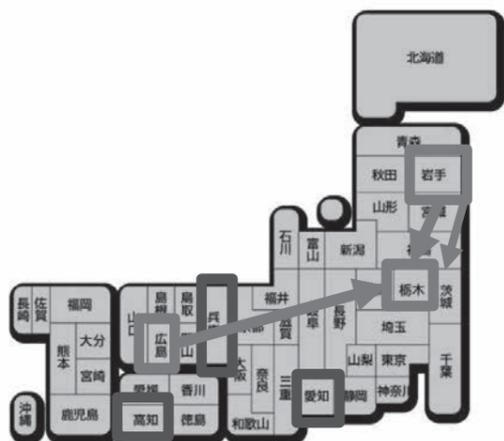
◆地域別参加者数：321名



◆研修会参加後の学生の変化・動き

1. 災害支援、被災地支援活動
地元災害時に、VC支援や被災地支援の活動に取り組んでいる
2. 学生ボランティア団体の立ち上げ
・「未だ被災していない地」「未来に被災する地」として“未災地ツアー”の企画（高知県）
・地元の防災力を高めるため、防災訓練の参加や防災教育の実践などに取り組んでいる
3. 地域や学生交流の場づくりの企画・運営
Donabenet（土鍋交流会）や地域運動会の企画・運営などに取り組んでいる

◆地域を支える若者のチカラ コミュニティ支援力養成研修会の効果ともいえる実践事例

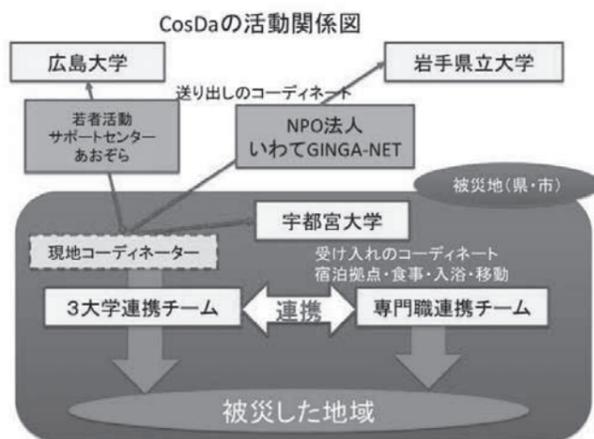


【開催地の被災】

- ・「平成27年9月北関東・東北豪雨」における、栃木県鹿沼市の災害支援
- ・地域のニーズ（生活課題）を細やかに探っていくアウトリーチのしくみづくり

CosDa（コスダ）

Cooperation outreach system in Disaster areas
・災害地域における連携型アウトリーチシステム



- * コミュニティ支援力養成研修会やいわてGINGA-NETで生み出されたネットワークを通じて、実際に学生たちが連携し、水害の被災地支援にあたった事例が生まれている
- * 直後の災害でこのネットワークが活かされた
- * 岩手県立大学での学びが全国各地の大学・地域へとつながっていくことが、コミュニティ支援力養成研修会の実践から見えてきている

シンポジウム報告

いわての教育及びコミュニティ形成復興支援シンポジウム
—岩手県立大学のコミュニティ支援を通じた人材育成と復興支援プログラム—

日時 平成28年2月20日（土） 13:00～16:20

場所 エスポワールいわて 大ホール

プログラム

- 13:00 開 会 鈴木 厚人 岩手県立大学長
- 13:05 事業の説明 佐々木民夫 岩手県立大学高等教育推進センター長
- 13:15 各事業の報告
木村由佳梨 総務企画課長 [(一社)子どものエンパワメントいわて]
八重樫綾子 代表 [NPO法人いわてGINGA-NET]
菅野 道生 災害復興支援センター復興支援員 [岩手県立大学]

14:00 事業参加学生、団体等によるリレートークとポスターセッション

15:10 シンポジウム
「地域と学生をつなぐ —大学による復興支援・人材育成の成果と今後の展望—」

- シンポジスト：
- 八重樫綾子 代表 [NPO法人いわてGINGA-NET]
 - 山本 克彦 准教授 [日本福祉大学]
 - 長谷川万由美 教授 [宇都宮大学]
 - 佐々木喜之 主任兼社会教育主事 [住田町教育委員会事務局]
- コーディネーター：石堂 淳 企画本部長 [岩手県立大学]

16:20 閉会

【開会】鈴木厚人 岩手県立大学長

私は、2015年4月に岩手県立大学に赴任しました。本学が岩手県における復興支援に活発に取り組んでいることは、想像を越えるものでした。これまでに、学生の皆さんと様々な課外活動を通して沿岸地域に行ったり、被災者の方々の話を聞いたりしました。その時に、これからの復興支援にどのように取り組んでいくべきかを考えました。本日のシンポジウムのタイトルに“コミュニティ形成復興支援シンポジウム”とありますが、このコミュニティ形成が重要だと思っています。阪神・淡路大震災の復興支援の経験から、5年が経過したのちは、直接的な復興支援の他に、協働するコミュニティ形成にどのように支援するかが重要になると聞きました。“町内会を盛り上げる”ということは簡単ですが、実際にどう実現するかが課題です。これからは、いろんな地域コミュニティの形成に尽力しようと思っています。若い皆さんもより一層、その力を地域貢献に役立ててほしいと思います。今日は皆さんの事業報告やシンポジウムでの議論を聞かせてもらい、勉強させていただきます。そして、今後の本学の復興支援活動を教職員および学生とともに、より推進していくつもりです。

【各事業の報告】

◆いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業

[学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業]

1. 学生ボランティアによる小中高校向け学習支援・居住支援

—居場所づくり 寄り添いサポート—

報告者：木村由佳梨 総務企画課長 [(一社)子どものエンパワメントいわて]



子どものエンパワメントいわて(通称:イーパッチ)の事業の1つである“学びの部屋”(学習支援)は、各会場に学習支援相談員を配置し、支援している。学生ボランティアが現場に入ることにより、質を向上することができた。基本的に自学自習を大切に勉強するため、こちらで特別何かを用意するわけではなく、各自が決めた勉強を決めた時間に行うというルールで実施してきた。平成28年1月までの5年間の実数で1,880人のボランティアが学習支援に入ってくれた。学習面や相談面の寄り添いが丁寧にでき、話しをする中で、大学生が津波のことを知る機会になる。また、大学生の中学生・高校生時代の話や、自分が興味のあることを聞くことで、子どもたちの将来の選択肢や視野が広がり、良い刺激になっている。

2. 学生ボランティアを中心とした地域コミュニティ復興支援

—全国の力を岩手に 岩手の経験を地元へ—

報告者：八重樫綾子 代表 [NPO法人いわてGINGA-NET]



いわてGINGA-NETプロジェクトは、被災地のニーズとボランティアをしたい学生のニーズをつなぐ仕組みとしてスタートした。住田町の公民館を拠点として、中長期大学生が滞在する、災害時の学生ボランティアによる大規模拠点運営の仕組みを築いた。これまで14回、のべ1万6千人が参画した。主に県内の学生は参加だけでなく、参画を目指す。日々の活動でPDCAのサイクルを意識して行い、持ち帰りのプロセスも大切にしている。その場の体験だけでなく、地元を持ち帰り、それを次にどう活かすかを考え、次の展開につなげていくプロセスを大切にしている。東日本大震災で被災した地域とそこに生きる人たちのことを忘れずに、継続して支援してほしいということ、岩手での経験を持ち帰り、自分が生活する身近な地域で何ができるかを考え備えてほしい、という2つのメッセージを5年間伝え続けている。

3. 学生ボランティアを対象とした地域コミュニティ支援力養成

—岩手での学び 全国に広がる、つながる—

報告者：菅野 道生 災害復興支援センター復興支援員 [岩手県立大学]



実際に活動で地域に出て活動するだけでなく、その中に学びを位置付けていることが重要だった。コミュニティ支援力養成研修会は、学びの部分を担当事業としてスタートした。学びを位置付けることで、自分たちの体験を行動化し、ノウハウにして持ち帰る。自分たちの地域でコミュニティ支援の活動が広がっていく。研修を通し、それぞれのコミュニティで地域を担う、若者の主体化形成を行っていくことが事業の特徴である。2012年3月から全国6県・計8回実施し、321名が参加した。研修会後、地元の防災力を高めるため、団体の設立や地域行事への参加に取り組むなど、学生はそれぞれの地域で活動している。

2015年9月に発生した北関東・東北豪雨水害では、これまでのネットワークを活かし、3大学が連携して鹿沼市の被災地支援にあたった。岩手県立大学での学びが全国各地の大学・地域へとつながっている。

【事業参加学生、団体等によるリレートークとポスターセッション】

◎川原 直也(岩手県立大学総合政策学部:いわてGINGA-NETプロジェクト参加)

—GINGA-NETでの活動 経験つなぎ動く—

岩手県立大学で風土熱人Rというサークルの代表をしている。風土熱人Rは災害復興支援や地域の防災活動を行うサークルで、最近は関東・東北豪雨災害では、栃木県鹿沼市のボランティアセンターの運営支援や常総市のイベント支援を行った。僕自身、広島県や住田町でのコミュニティ支援力養成研修会で災害ボランティアセンターの運営について学んでいた。その学びが活かされた場だった。いわてGINGA-NETのフィールドワークの時、仮設商店街で話を聞いた。お店の人が、「もう復興とか震災とかではなく、魅力で勝負していきたい」と言っていたことが印象に残っている。「震災の風化がある」、「岩手の魅力を伝えたい」という想いが生まれ、「うめえもん届け隊」が誕生した。全国の学生ネットワークを活かし、岩手の名産や人の魅力などを全国の大学の学園祭を通じて発信していく活動を行っている。

◎宮本 大毅(岩手県立大学総合政策学部:学びの部屋参加)

—イーパッチでの活動 子どもたちの力を信じ見守る—

2012年の大学1年生のころは、毎週宮古市に学習支援に通っていた。現在は陸前高田市、大船渡市の学びの部屋のコーディネーターをしている。宮古市の学習支援は、震災を機に不登校になった中学生3~4名が対象だった。若く近い世代が支援に入った。子どもたちは集中力がなく、勉強してもすぐ飽きていた。そこで宮古市社協の体育館を借りて週一回、フットサルをするようになった。集中力がなかった子どもたちは、生き生きと体を動かし、空いている時間は切り替えて勉強することにした。運動と勉強が少しずつできるようになり、フットサルも少しずつうまくなってきた。その後、市内のフットサルチームを誘ってフットサル大会を開催した。大人チームに中々勝てない中で、子どもたちの「悔しい」という気持ちが見えた。気持ちを表に出さない子ども達だったので、保護者の方からは、「感情を表に引き出したこの活動に感謝している」という声があった。その後、高校受験の勉強に切り替え、彼らは無事に志望校に合格できた。現在高校2年生になり、「大学に行きたい」、「地元企業に就職したい」、など将来の夢を抱いている。今回の学習支援で心がけたのは、イーパッチの「3間」の居場所支援だった。いろいろな形で沿岸の子どもたちの心の底には、「津波」があった。それを引き出していいのか、引き出すと悪いのか、引き出さないといけないのか、という感覚は学習支援相談員によって違う。デリケートな部分に気を付けながら取り組んできた。子どもたちや学生にとって、いい経験になり、どちらも成長できた。



◎小林 美輪（高知県立大学イケあい地域災害学生ボランティアセンター）

— “未災地”の意識 活動への展開—

2012年の夏銀河に先輩が参加し、岩手県の学生がボランティアセンターを運営しているのを見た。南海トラフ地震が起きたときは自分たちが窓口になりたい、という気持ちが生まれ、団体を立ち上げた。団体の活動として開催したのが、“未災地ツアー”である。目的は3つあり、1. 高知の課題・魅力を知ってもらうこと、2. 高知で得た知識や課題を自分の地域に持ち帰り、地元で活かしてもらうこと、3. 学生のネットワークをつくること、だった。2013年5月に初めて未災地ツアーを開催した際に、GINGA-NETで出会った学生や、関西からも参加者があり、つながりができていると感じた。岩手では“被災地ツアー”がある。高知県では、それを文字って“未災地”と名付けている。「未だ被災していない地」、「未来に被災する地」、という2つの意味がある。いわてGINGA-NETへの参加をきっかけに、私たちの活動が始まり、現在につながっている。

◎山崎 水都（高知県立大学イケあい地域災害学生ボランティアセンター）

2014年の夏銀河に参加した。期間中に広島県土砂災害が発生し、参加者の中に被災した地区に住む学生がいた。その学生は夏銀河終了後、現地の災害ボランティアセンターで活動をしていた。私たちも高知からタオルを送り、発災1か月後にはイケあいから先遣隊3名が現地入りし、3日間活動をおこなった。その1週間後には大学を上げて、看護学部や社会福祉学部、大学院生など合計25名が広島での復興支援活動に参加した。高知県立大学には社会福祉学部や看護学部があり、災害時に役に立つ学部が現地に行かせていただくことで勉強にもなった。いわてGINGA-NETのおかげでネットワークをつくることができ、“うめえもん届け隊”を高知短期大学、高知県立大学で実施した。震災に興味のある方を対象に、銀河に参加した感想などを伝えることもできた。

◎清水 幹生（高知県立大学イケあい地域災害学生ボランティアセンター）

出身の愛知県でも地震がくると言われている。高知県も地震がくると知り、興味を持って団体に入った。2015年の夏銀河に参加したとき一番印象的だったのは、釜石市の鶴住居地区のお祭りが復活する時に参加したことだった。新しい御輿の完成を喜んでいる地域の方の姿や、以前の御輿との違いを教えてくださいました。復興支援や防災活動は、具体的な防災活動だけでなく、普段から地域のお祭りなどに入り、それを継続していくこともつながると感じた。高知に帰ってからは地域イベントに参加する意味を見直すことができた。

◎大岡 千紘（高知県立大学イケあい地域災害学生ボランティアセンター）

岩手の方が、「岩手に興味を持ってもらえなくなることが1番怖い。」と話していたことが印象的だった。イケあいでも、岩手のわかめを使ったスープやご飯を無料配布する活動をしている。これからもつながりをつくり、魅力を広めていきたいと思う。

◎佐野 聖奈（高知県立大学イケあい地域災害学生ボランティアセンター）

高知県出身で、必ず被災することがわかっている。銀河で学んだことを高知で活かして活動していきたい。

◎小原 裕也（釜石市社会福祉協議会：平成27年3月 岩手県立大学卒業）

2011年に入学してすぐ八重樫さんに出会い、「釜石に行く？」と誘われたことがきっかけだった。震災前までは名前しか知らなかったが、少しでも釜石の方々が元気で安心して暮らせるお手伝いがしたいと思い、釜石市社会福祉協議会に就職した。現在は地域コミュニティ係を務めており、復興公営住宅や応急仮設住宅の交流支援事業を行っている。いわてGINGA-NETでは、様々な方々との出会いがあった。地域に入っていくこと、人と接すること・関わりの感性を教えていただいたと感じている。この1年で、いろんな関係機関の方や住民の方と広くつながりをつくることができてきた。人との出会い方、つながる力、“迷ったらGO”のフットワークを学んだと思っている。

【パネルディスカッション】

「地域と学生をつなぐ」 大学による復興支援・人材育成の成果と今後の展望」

◆シンポジスト 紹介



八重樫 綾子 さん

NPO法人「いわてGINGA-NET」代表、岩手県立大学災害復興支援センター教育復興支援員、文部科学省生涯学習政策局教育復興支援員、岩手県立大学社会福祉学部卒業。入学当初より「岩手県立大学 学生ボランティアセンター」に参加し、岩手宮城内陸地震、東日本大震災で災害支援活動に関わる。2012年2月に「いわてGINGA-NET」を設立し代表に就任。GINGA-NETプロジェクトを中心に、学生による被災地支援活動のコーディネーション業務を担う。近年は研修や活動体験プログラム等を通じて、学生ボランティアのネットワーク構築、人材育成にも取り組んでいる。



山本 克彦 さん

日本福祉大学福祉経営学部医療・福祉マネジメント学科准教授。専門は地域福祉と災害ソーシャルワーク。一般社団法人子どものエンバワメントいわて代表理事もつとめる。2014年3月まで岩手県立大学に勤務。東日本大震災の際には県立大学の学生らとともにいち早く被災地支援活動に乗り出す。県立大学所属時に、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」の立ち上げに関わり、プログラム運営全般において主導的役割を担った。日本福祉大学に移った後も、頻繁に岩手に通い、本事業運営を全面的にバックアップした。



長谷川 万由美 さん

宇都宮大学教育学部教授。専門は地域福祉論、福祉NPO論。東日本大震災の際には、宇都宮大学の学生らとともにGINGA-NETプロジェクトに参加し、岩手県沿岸の被災地支援活動に取り組んだ。その後は宮城県亘理町を中心に宇都宮大学学生による被災地支援活動をサポート。また2014年10月に宇都宮大学で開催された第6回コミュニティ支援力養成研修では会場の担当者として研修の企画・運営にあたる。これらを通じたネットワークが、2015年9月の関東・東北豪雨災害における、鹿沼市での災害支援活動の大学間連携（宇都宮大、岩手県立大、広島大など）につながった。



佐々木 喜之 さん

住田町教育委員会事務局生涯学習係主任兼社会教育主事。震災以降、住田町役場は町内にある五葉地区公民館を学生たちの活動・宿泊の拠点として提供。住田町は岩手県南部沿岸の被災地域へのアクセスがよく、また調理施設や体育館等の設備も整った公民館は活動の拠点としてこれ以上ない施設であった。佐々木氏は住田町役場の窓口として、施設使用に関する役場内および地域住民との調整等に尽力。以来、現在まで一貫して、学生と地域とのパイプ役となって活動を支えている。日ごろは社会教育主事として、住田町の豊かな自然環境を活かした様々な体験学習プログラムの企画・運営を行う。

《石堂》前半事業の説明で学生と地域のつながり、大学と学生のネットワークを理解していただけたと思います。シンポジウムでは、活動を通じて、大学、地域がコミュニティの再生・形成に対する支援をどのように継続していくか、方向性や課題は何かをもとに進めていきたいと思っています。本事業の立ち上げから事業展開まで中心に関わっていただいた山本先生から、お話しをお願いします。

【山本】

- ・愛知県の日本福祉大学に行くまでの11年間、岩手県立大学で学生と共に地域に出る活動を実践し、私自身が育てられました。災害はいろいろな意味で心に残り、そこに関わることは人生の大きな体験の場だと思います。学生の活動を“ボランティア”と呼ぶか、必要なことがあるため、それに応じて“あたりまえの活動”と呼ぶか、です。何かチャンスがあれば地域に出て、できることをやろうと動き出しました。2004年に新潟中越地震、2007年に新潟中越沖地震が起こり、そのあたりから始まりました。2008年に設置された岩手県立大学学生ボランティアセンターは、場所や予算は大学が用意し、学生のみで事務局を運営する、おそらく全国ではじめてのセンターです。この頃から、「学生がいろいろな依頼を受けるだけではもったいない」と感じ、地域に出て何ができることを見つけ、プロジェクトとして作り出すという取り組みを進めてきました。
- ・東日本大震災当時、私は学生と沿岸を走り回っていました。大規模災害のため、国の担当者が視察に来てくださり、私が岩手県の様子をお伝えしました。子どもや地域の様子を知るうちに、子どもの支援が必要だという意見が出て、陸前高田市の学習支援に動きまわりました。それがイーパッチのスタートです。

《石堂》宇都宮大学の長谷川先生、北関東・東北豪雨水害（以下：水害）でも実際に経験が活かした部分もあると思いますが、学生の支援活動について、大学の連携・課題についてお話しいただけますか？

【長谷川】

- ・東日本大震災をきっかけに、岩手県立大学に私自身が育てていただいたことを感じています。2011年

の夏にいわてGINGA-NET（以下：GINGA）に学生と参加した経験が、それ以降の宇都宮大学の支援活動のノウハウにつながりました。2014年の秋にコミュニティ支援力養成研修会を宇都宮大学で開催しました。その時は、首都直下型地震の際、東北からの支援を関東につなぐ中継地点を想定して行いました。

- ・2015年の秋に、水害の災害対応をすることになりました。その時に、栃木県鹿沼市の災害ボランティアセンター（以下：災害ボラセン）に学生と支援活動で参加しました。先ほど、「岩手県でノウハウを学び、地域に持ち帰り、地元で展開してほしい」というお話がありましたが、学生だけの話ではありません。ノウハウを持っている大学は少ないです。私たちは岩手県の活動でのノウハウを持ち帰り、水害支援に活かすことができました。そのことが、学生ボランティアの受け入れにつながり、この事業の1つの成果でもあると思います。
- ・2015年の水害被災地は栃木県内でも点在しており、被災原因も様々です。川の堤防決壊、山の鉄砲水など、津波とは違う支援の難しさを感じました。9月9、10日に大雨が降り、12日の日曜日に山本先生と私と学内スタッフで現地視察を行いました。山本先生からの助言で、鹿沼市社協と相談し、災害ボラセンの支援に参加しました。様々な業務として、ボランティアの受付・送り出し、資材の確認、データ入力、案内板の設置や資料作成など、0から参加しました。“お話し聞き隊”として、被災された自宅にうるうるパック（災害支援物資）を持って戸別訪問し、お話をお聞きする活動も行いました。実数63名、のべ144名の学生ボランティアを派遣し、そのうち2日間はボランティアバスの運行も行いました。シルバーウィークには、岩手県立大学、コミュニティ支援力養成研修会の開催地であった広島大学が参加し、3大学連携で活動を行いました。そこで学んだノウハウを活かし、10月に入ってから大学連携により他大学の学生も参加し、“お話し聞き隊”による戸別訪問を行いました。大学にボランティア活動の相談をすると、「泥出し」という発想となります。地元の大学として継続的に学生を派遣できる立場から、災害ボラセンと連携し、初期から運営に携われたことは大きな成果でした。
- ・高齢化が進む鹿沼市の被災地では、若者が来てくれるだけで喜ばれました。いろいろな人が災害の被害状況の確認に来られる中、若者だからこそ心を開いてくれる安心感も確認できました。平常時からいろいろな連携機会を持つことで、水害時にも連携が具体化でき、私も自信を持つことができました。参加学生にとっても、他大学の学生と活動することで、違う視点に気付いたり、他大学の活動に刺激を受けたり、大きな効果があるように感じました。



《石堂》お二方から、大学教員の立場からお話しいただきました。東日本大震災当時は学生で活動し、その後、NPOとして見てきた八重樫さんから、何かコメントはありますか？

【八重樫】

- ・私は大学生でありながら、学生コーディネートをさせていただく立場でした。現場で周りの大人の方々に支えていただき、その後に生きるトレーニングとなり、成長させていただける場でした。印象に残っているのは、混沌とした被災地で、200人の学生ボランティアの生活と活動を支え、どう必要な場所に

届けるか、でした。私は釜石市の災害ボラセンで、炊き出しボランティアを避難所につなぐ電話窓口を担当していました。ボランティアがやりたいことではなく、地域に必要な支援を届ける調整が難しかったです。経験、スキルも大切ですが、地域・住民が主体であり、そこに寄り添う謙虚な気持ちや姿勢が大切だと感じました。学生たちは、そのことを自然と身に付けていったと思います。そのことが宇都宮大学との協働の中でも生きてきたのではないかと強く感じます。

【山本】

- ・長谷川先生は2011年の夏銀河に参加し、学生と共に生活されました。私は、やんちゃな先生は大切にあり、大学の財産だと感じています。私たちは岩手の学びを持ち帰り、「もしもの時は学びを活かしてほしい」というメッセージを投げ続けました。コミュニティ支援力養成研修会を複数の大学で開催したのは、「自分の土地で災害が起きたらどうするか」、を考えてもらおうと思ったからです。開催場所として、東海・東南海・南海地震を想定し、高知県立大学、日本福祉大学を選びました。首都直下型地震を想定し、宇都宮大学でも開催しました。大学として、学生の力を活かすプロセスは、とにかくやってみて、そこで起きたことを体系立てて説明することです。「今やったことはこういうことだ」と定着させることが大切です。水害の支援活動では、岩手県立大学は、GINGAが間に入り、広島大学は、若者活動サポートセンターが間に入り、学生を現地につなぎました。現地コーディネーターとして、イーパッチ代表の私が現地入りし、状況を見て組み立てました。そのことで3大学の連携チームが誕生し、被災した鹿沼市支援につながりました。災害が起きた時に1番大切なのはニーズです。ボランティアがしたい人に提供するのではなく、必要なことがあるから、ボランティアというマンパワーが活かされます。鹿沼市での水害支援では、その地域を支える保健師や看護師などと連携して取り組んだことが大きな意味を持ちました。専門職が頑張る地域を廻っても、心を開かない方や遠慮する方がいます。学生がまわることで、「よく来てくれた」、「実はしんどい、大変」という話をしてくれます。

《石堂》地域の視点で今回の被災地支援において、GINGAは住田町のサポートを受けました。住田町は沿岸から内陸に入った場所にあり、復興支援の最前線の地となりました。学生や大学の活動がどのように見えていたか、地域からの視点でお話しをお願いします。

【佐々木】

- ・住田町教育委員会、地元市民の立場から話します。震災後、山本先生と八重樫さんが拠点施設を探しに住田町役場に来られました。役場の周りの施設にはすでに国内外の支援組織が入り、空きがありませんでした。偶然、廃校になった小学校の校舎を壊して建てられた、五葉地区公民館が空いていました。この公民館は、釜石市や大船渡市に30分で移動できる距離にあります。震災当時、多くの人が「何かやりたい」、という気持ちでした。地元の人間としては、公民館をボランティアに提供することで、間接的に支援に貢献できているという想いもありました。公民館は教育委員会で施設管理をしていますが、私は公民館の近くに住んでいることもあり、管理と窓口を任せられました。家族ぐるみでお付き合いをさせていただいています。
- ・敬老会の手伝い、冬は雪かき、最近では、地元との交流会の開催など、住田町にも貢献していただいています。敬老会の盆踊りの手伝いでは余興もしてもらい、地元の人に大好評でした。次の年は日程が合わず手伝いをしてもらえず、地元の方はとても残念そうでした。GINGAは、地元の人々の心も開いてくれました。
- ・GINGAの活動により、多くの方が住田町に来てくれました。ボランティアに参加した学生が、役場に顔を出してくれることもあり、嬉しく思います。震災がなければ来ることがなかった人がたくさ



- ん来てくれたことは、不思議な縁だと思っていますし、ずっと大切にしていければと思っています。
- ・ GINGAへの要望は、住田町の地元にもっと入り込んでもらえると嬉しいです。私たちが体育館で郷土芸能の練習などを行っている時に、その様子を見学したり、一緒に踊ってもらえたりすると嬉しいです。改まった交流だけでなく、柔軟に交流できる場があれば、地元の人にも嬉しいと思うのです。復興支援に来ているので、振り返りが大切なことも承知していますが、地元の人がそう思っていることを頭の片隅に置いてもらえると嬉しいです。
 - ・ また、住田町の人々がGINGAの活動をよくわかっていない現状があります。どう伝えていくかを考えていきたいのです。住田町は田舎で過疎化が進んでおり、今なんとかしないと、町が機能しなくなるため、いろいろな活動に取り組んでいます。GINGAの活動は、過疎対策の大切な部分を担ってくれています。交流人口の拡大はとてめえありがたいです。引き続き、住田町を拠点に活動してもらえると嬉しいです。

《石堂》学生の活動は5年経つと風化防止に向けた活動であり、復興支援活動になっていきます。住田町での活動で地域に入り込むことにより、地域活性化にもつながる働きにもつながっていると感じました。GINGAの運用にあたり、そういった点も意識しているのでしょうか？

【山本】

- ・ 災害時の支援活動が、日常の活動にもつながっています。プログラム上、年々その変化があると思います。

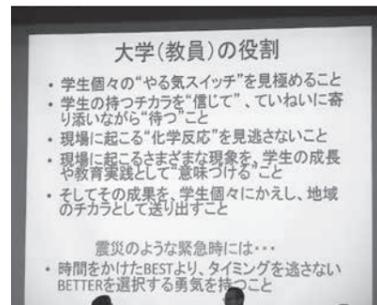
【八重樫】

- ・ 参加学生も変わってきていると感じます。「普段地域とどう関わればいいのかわからない」、「災害に対して学生が地域の力になりたいが、どう地域と取っ掛かりをつくっていけばいいのかわからない」という相談を受けます。“災害”や“防災”という言葉が表に出ていなくても、普段の地域の行事や交流会、食事などに参加することから、顔の見えるつながりができていくことを、住田町の活動の中で体験してもらっていると思います。住田町だけでなく、沿岸地域でもそうです。体験するだけでなく、そこから何が見えるか、自分たちの地域に置き換えたときに、今、身の回りのできることに何かあるのかを、岩手の学生と共に考えることが大切だと思います。

《石堂》経験を通じてノウハウや知識が蓄積されていると思います。それをコミュニティ支援力養成研修会などで活かしているのですね。ノウハウや知識の蓄積は、教育的な側面から出てきます。それらをどう活かしていくかは、大学が考えなければいけないことだと思います。ある程度体系化し、伝えていく上で、大学の職員として、大学として、どのようなことが必要になるか、山本先生、長谷川先生、ご意見いかがですか？

【山本】

- ・ 今日のテーマの「大学による」という言葉から、“大学や教員の役割は何か”を箇条書きにしました。1つ目は「学生のやる気スイッチを見極めること」。どの学生もやる気スイッチをどこかに持っています。スタートダッシュの個性はありますが、どこかにスイッチがあると確信しています。2つ目は、「学生の持つ力を信じ、丁寧に寄り添いながら待つこと」です。その子なりの力、得意なことがあると考え、じっくり待つと、ふっと出てくる場合があります。そこを捕まえることが、私たちの役割です。3つ目は、「現場で起こる化学反応を見逃さないこと」です。GINGAは、まさにそうでした。何百人の学生が来ると、その瞬間で



ハッとすることや、誰かと誰かが出会って動き出すことがあります。それを“化学反応”と言っています。それを見逃さない。見逃さないためには、そばにいないといけません。長谷川先生はGINGA参加期間中、ずっと学生の側にいてくださったので、捕まえるところを極めておられました。4つ目は、「現場で起こる様々な現象を学生の成長や教育実践として意味づける」です。石堂先生がおっしゃったように、「やっていることの意味」や「学生のどのような学びになっているか」を“教育”という言葉につないだとき、今やっていることが何かを描けないとダメだと思います。お茶っこサロンは、お茶を飲んでお菓子を食べる活動です。では、そこにどのような意味があるか。地域がバラバラになった方が一カ所に集まり、人がつながることで、どれだけ不安を解消することになるか、コミュニティを作り直すか、です。その成果を学生個々に返し、地域の力として送り出します。やってきたことを、学生にしっかり返します。それを力に、学生はまた地域に出ていきます。非常に生き生きする力を感じました。最後に5つ目は、「震災のような緊急時には、時間をかけたベストより、タイミングを逃さないベターを選択する勇気」が必要だと思います。特に大きな組織に所属していたり、教員という立場を背負ったりすると、動きづらいときがあります。しかし、「緊急の場合はベストではなくベターでよい」という気持ちで動いています。

【長谷川】

- ・ 今いただいた質問は、私の課題でもあります。宇都宮大学には学生ボランティアセンターはなく、ノウハウの蓄積が大学に広がりません。体系化や、継続への仕組みにつなげていくことが、大学としての1番の課題だと思います。東日本大震災のボランティア活動に学生と共に支援に参加させていただいた時から感じているのは、目の前の短期的な教育効果だけでなく、長期的に考えることが大切だということです。5年10年かかる復興の中で、学生は入れ替わり卒業します。大学としては新しい学生を相手にしますが、卒業後の仕事の中で、学生時代の経験が活かされます。長期的なスパンで教育効果を考えていかなければいけないと思うのです。今回の水害後に、GINGAに参加した学生に、その後について聞いてみました。水害のボランティアに行った学生もおり、学生1人1人の生き方の中に影響を与えたことがわかります。ここでの体験がどこかで芽を出しています。首都直下型地震や南海トラフ地震で、これまでの活動で培った力が集まることもあるのではないかと思います。

《石堂》フロアからの感想や意見はありませんか？ 山本先生、推薦をお願いします。

【山本】

- ・ 陸前高田市の災害ボラセン立ち上げに携わった早川くんをお願いします。

【早川】

- ・ 現在は大学職員として勤めています。2011年の陸前高田市の災害ボラセンの立ち上げに携わりました。山本先生にやる気スイッチを押され、陸前高田市に入りました。いろいろな方が災害ボラセンに来る中で、自分をうまく入り込ませることや、そこにいる人たちと調和や協同しながら、その場をうまく運営していく感覚が身に付きました。今の大学の仕事でも、人との関わりの中での時の経験が生きています。先生方や八重樫さんの姿を見て、学生の成長の機会を支えていきたい、応援したいという思いで大学職員に転職しました。あの経験は、自分の人生に大きな影響を与えたと思います。



《石堂》八重樫さんから見て、大学という存在をどのように感じていますか？

【八重樫】

・最初にプロジェクトを立ち上げた際、全国では大学として学生の活動にストップをかけていた大学が多くありました。岩手県立大学として看板を上げて学生を受け入れるというネームバリューがすごく貴重でした。そのおかげで「学生を送り込みます」「参加します」、ときっかけを開いてくださった方たちがたくさんいました。

《石堂》課題としては、学生が主役の活動をどうサポートするか、大学の体制をどうつくっていくか、ということがあります。そして、被災地支援、風化をどう防いでいくか、ということがあります。いろいろな地域で若い学生の力が有効に働いていることが見えてきました。最後に一言ずつまとめをお願いします。

【佐々木】

・住田町は柔軟に対応できていると思います。住田町をフィールドに、連携して取り組んでいけると嬉しいです。

【長谷川】

・岩手県立大学、GINGAから学ばせてもらい、活動につながりました。今後は鹿沼市に全国の学生に来てもらえるように、宇都宮大学の学生の“やる気スイッチ”を見つけ押していきたいと思います。

【山本】

・東日本大震災当時は想いを持った学生に大学としてGOを出せない大学がありました。「責任をとれないから大学の名前を言わないように」と言われてきた学生もいました。岩手県立大学があの時、大学の名前を出してバックアップしてくれたことで、活動場面をつくることができ、受け入れられたことはよかったです。当時一緒に活動した学生にありがとう、という想いです。日本福祉大学は、東海・東南海・南海地震の危機的な状況です。何かあった時は、ここにいる方々や出会った方に支えてもらえると思っています。その時がきたらよろしくをお願いします。

【八重樫】

・卒業生とのつながりを大切にしていきたいです。4年間活動した学生が卒業し、全国や各地で学生の活動や地域と若い人をつなぐ役割を果たしていくことができます。すごくいい種をまく役割になる可能性を感じています。学生とOBOGのつながりづくりを、GINGAの場を活用し、つくっていきましょう。

<学長>

学生ボランティア活動が教育・人格形成にも重要だという視点を活かして、今後も推進していきます。今日はこれだけ大きなインパクトを与える支援活動を、どう行政に反映させるのかという話が聞けませんでした。どのように住民が行政に参加するのか、協働するコミュニティ形成です。このようなボランティア活動をとおして、行政がその活動をくみ取る仕組みが必要だと思います。もう一つ、住田町とGINGANETのように、ボランティアで培われたノウハウを行政につなげることも大切だと思います。ボランティア活動のノウハウや組織作りを、どのように行政に反映させるのか、これから考えていきたいと思っています。



おわりに

東日本大震災における学生ボランティア活動を発展させ、被災地のニーズに的確に対応した継続的な被災地復興支援を目標に、平成23年度から文部科学省の補助採択事業として実施してきた本学の「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」が、平成27年度末でその5年間の事業を終えることになりました。まずもって、文部科学省をはじめとする関係諸機関等のご支援に対して衷心から感謝申し上げます次第です。

本事業は、①学習支援・居住支援、②地域コミュニティ復興支援、③コミュニティ支助力養成、の3事業を柱とするものですが、いずれの事業もその特徴は、本学学生の独自のボランティア活動をベースにして本学が全学的に取り組んできたところにあります。

本事業の具体的取り組みの経過とその事業内容は本報告書に記載の通りですが、本事業の実施によって、本学の学生ボランティア活動が全国的に注目を集めるとともに、全国の学生ボランティアのネットワークが組織化され、その連携の下、災害復興や地域貢献に関わる多様なボランティア活動が展開されることになりました。

本事業が、このような新たな展開への道筋をつけることができましたのは、本事業の内容をご理解いただいた関係者の皆様の温かいご支援・ご協力の賜物と存じております。改めまして敬意と感謝とを申し上げます次第です。また、一般社団法人「子どものエンパワメントいわて (E-patch)」、NPO法人「いわてGINGA-NET」には、本事業の一部を受託していただき、本学との連携の下、円滑な運営を推し進めていただきました。厚く御礼と感謝とを申し上げます次第です。

本事業は、平成27年度末で終了いたしますが、被災県にある公立大学として本学の復興支援活動、地域貢献活動は今後も継続的に実施していく所存であります。今後は、本事業における成果と課題とを検証し、これからの新たな復興支援活動に繋げていきたいと考えております。関係者の皆様の今後の変わらぬご支援・ご協力をお願い申し上げます次第です。

高等教育推進センター長
佐々木 民夫

本報告書 執筆者一覧

山本 克彦（日本福祉大学福祉経営学部 准教授）

木村由佳梨（一般社団法人子どものエンパワメントいわて 総務企画課長）

八重樫綾子（特定非営利法人いわてGINGA-NET 代表）

河田のどか（特定非営利法人さくらネット 防災・減災教育担当）

いわての教育及び
コミュニティ形成復興支援事業報告書

平成28(2016)年3月

発行 岩手県立大学

企画・編集 岩手県立大学災害復興支援センター
